

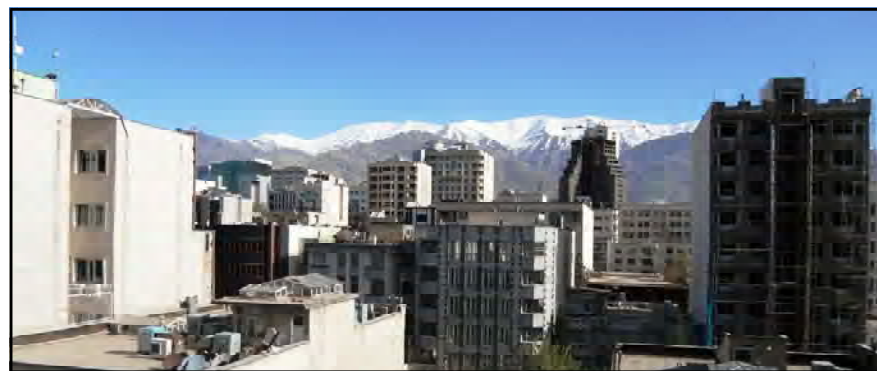
# باد از تهران

～ テヘランからの風 ～ 第1号 4月17日配信

伊里中学校のみなさん、こんにちは。在イラン日本国大使館附属日本人学校(テヘラン日本人学校)の大河原崇視です。1年生のみなさんは、初めまして。伊里中学校での生活も1週間を過ぎ、そろそろ学校に慣れてきた頃ではないでしょうか。2、3年生のみなさん、進級おめでとうございます。それぞれ、新たな学年・クラスで、希望に燃えているところでしょう。

私は、4月6日に日本を出発し、およそ20時間の長旅の末、イランの首都テヘランに到着しました。そして、日本人学校で勤務し始めて、約10日間が過ぎたところです。

3月25日の修了式のあとの退任式で、少しお話ししましたが、みなさん、イランという国に対して、どんなイメージをもっていますか? 「戦争」「こわい」「テロ」「砂漠」そんなイメージをもつ人が多いと思います。実際、先生も退任式で「交通事故が多い」「とてもほこりっぽい」といった話をしました。



4月8日、時差ぼけの中、11時半頃に起き、窓の外をのぞき、初めて見るテヘランの景色にびっくりしました。(空港を出て、家までは、夜中だったので、真っ暗で、景色らしい景色は何も見えなかったのです。)

北の窓を開けると、ビルの向こう遙か北には、雪を抱いたアルボルズ(エルブルズ)山脈がドーンと見えたのです。また、南の窓から外を見ると、行き交う車と人の波、そして、遙か向こうまで大小様々のビルが建ち並んでいるではありませんか。自分のイメージとは全く違ったテヘランの街が、目に飛び込んできたのです。

この日から、先生のテヘラン暮らしが始まりました。これから、定期的にイランの人々の生活の様子(衣食住、文化、習慣)、そして、テヘラン日本人学校で先生が何をしているかなど、一テヘラン市民の目線でざっくばらんに紹介していきたいと思えます。もし、時間があれば読んでいただき、遠く異国の様子を知ってもらうとともに、「イラン」という国に対してもっているイメージを変えることができれば、これに勝る喜びはありません。

## ◆イラン国旗について



上から緑白赤の3色旗。緑はイスラームのシンボルカラー。白は平和、赤は勇気を表しているという。中央には4つの剣と三日月を用いたチュールリップをかたどったモチーフがあり、これは殉教者を表しているという。(『地球の歩き方』より)この旗は、街のあちこちにかかげられている。学校のそばを通るミラダマード通りにもはためいており、その

様子は、校庭からもよく見える。

## ◆首都・テヘランについて

テヘランは、西アジア、イランの首都でありかつテヘラン州の州都。イン高原の北西部の、標高1200～1000mほどの地点にある。北部にアルボルズ山脈がそびえ、その山麓に位置している。寒暖が激しく、夏は4度以上、冬には降雪も見られる。西アジアにおける道路交通の結節点であり、またイランの鉄道網の中心である。



人口はおよそ1100万人。テヘランはイランの文化的中心でもあり、多数の博物館、美術館、宮殿、文化センター、高等教育機関を擁する。宗教的中心でもあり、モスクのみならず、キリスト教の教会やユダヤ教のシナゴグも各所にみられる。住民の大多数はシーア派イスラム教徒。

テヘランの住民はペルシア人のほか、アゼルバイジャン人、アルメニア人、ユダヤ人など。住民の98.3%はペルシア語を話す。(『地球の歩き方』より)

## ◆テヘランの日常

片側3車線の道路にびっしりと車が連なっていた。この日は、木曜日の午後。イランは金曜日が休日(礼拝日)のため、木曜午後は、街は休日前の買い物客でごった返す。また、平日朝夕の通勤ラッシュはこれよりもさらにひどく、3車線の道が4～5車線になるなど、渋滞はさらに増す。



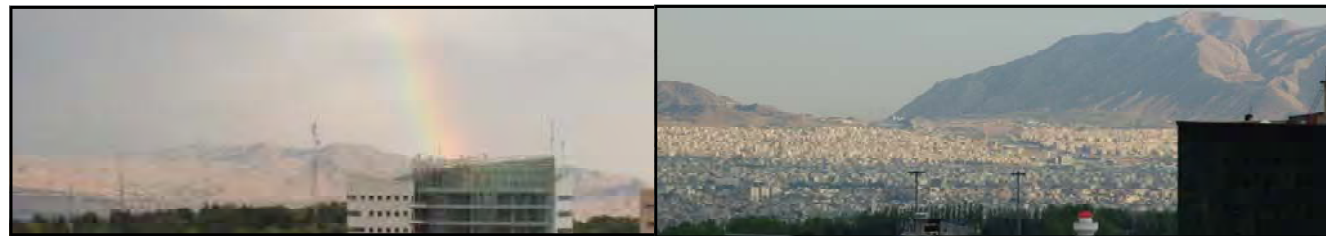
↑学校の近くの高速道路の様子(4/14)

# باد از تهران

～ テヘランからの風 ～ 第2号 5月1日配信

慌ただしい4月が終わり、今日から5月。日本では、GW真っ只中でしょうか。ここテヘランでは、先週、ほぼ毎日のように雨が降りました。1年を通して雨が少ないここテヘランですが、日本で言う夕立のような土砂降りの雨が降りました。当地の人に聞くと、「イラン人は雨が大好きだよ。なぜかって？それは……雨が大気の汚れを落としてくれて、空気がきれいになるからさ。」確かに、雨が降った翌日は、遠くの山も、街も、とても澄んで見えました。しかし、雨が降るのは季節の変わり目だとか…。もうすぐ、厳しい暑さが訪れることでしょう。

(写真左)雨が上がり、東の山すそに虹が(写真右)テヘランに来て初めて見た、東部の町並み(空気が澄んだおかげ?) [4/26]



今回は、赴任して約3週間の中で、私が行った場所から、その場でのエピソードを2つご紹介したいと思います。

テヘランの街を歩いていて、一番感じることは、「イラン人は、子どもが大好き。また、日本人が大好き。」ということです。先生の子どもは、先日、ここテヘランで5歳になりました。ある日、バスに乗り、終点まで行ってみようということになりました。やがて、バスは、テヘラン駅に到着しました。ここは、隣国トルコや、イラン南部の各都市まで行くことができる長距離列車、夜行列車の発着点で、列車到着時は、大きなトランクをいくつも抱えた旅行者でごった返します。その前で、おやつを食べていた時のこと。向こうから、何かもの言いたげなイラン人が近づいてきて私にこう言いました。「ユー、チーニー？ ジャポニー？ (あんた、中国人かい？ 日本人かい?)」



わたしが、「ミー、ジャポニー！」と答えると、とても嬉しそうな顔をし、友達のイラン人に「この人たち、日本人だよ。」みたいなことを言い、あれよあれよという間に5人のイラン人に取り囲まれてしまいました。そして、手に持っていた携帯電話(ソニー製でした)のカメラで、わたしたち親子と一緒に写真を撮り始めたのです。

みなさん、町中で外国人を見ても一緒に写真を撮ろうという人はほとんどいませんよね。ここテヘランでは(特にテヘラン南部では)日本人を見かけること自体が珍しく、日

本人を見ると、われ先に声をかけ、一緒に写真を撮ろうとせがむ人が多いのです。聞くとところによると、日本(日

本人)は同じアジアの国(国民)として、経済的にも成長していて、イラン(の人々)にとって手本となる、尊敬できる国(国民)だそうです。そんな遠い国から来た私たち親子に、「この携帯は日本のソニー製だ。イランに何しに来たんだい？ 旅行者かい？ 仕事で来たのかい？」などと、いろいろ質問を浴びせてきます。子どもは、最初おっかなびっくりの表情でしたが、相手が恐い人ではないと知ると、いくらか慣れた顔つきになり、おやつをもらったり、一緒に写真を撮ったりとうち解けていきました。(左のページの写真がそれです。)顔は、ひげもじゃで、背も高く、一見すると、恐そうなイメージがあるかも知れませんが、とても気さくで、話していて楽しかったです。そして、口々に、「日本では地震の被害はなかったか？ 福島は大丈夫か？」など、東北関東大震災の被害状況について心配してくれます。私が出会ったイラン人だけが親切だったのかも知れませんが、町行く人はみな気軽に声をかけてくれ、子どもの頭をなでてくれたり、ほっぺをさすってくれたり(子どもへの愛情表現のようです。うちの子どもは、嫌がりますが…)、バスの車内で席をゆずってくれたり…。町を歩くことで、今まで抱いていたイメージがどんどんと崩れていくことに驚くとともに、イラン(イラン人)に対してもっていたイメージがいかに一面的で、偏っていたかを反省させられました。



次は、花屋さんでのエピソード。テヘランの花屋さんは、とても華やか。赤や黄色、オレンジにピンク…。鮮やかな色とりどりの花が店先に並んでいます。日本のような店構えの花屋さんもありますが、写真のように、大通り沿いにこぢんまりとある花屋さんでの買い物の話。

休日の日の午後、教室に飾る花を買おうと一人で買い物に出かけ、店に入りました。しかし、花はあれど、店主はおらず。一見、無人販売？と思いつながりながら花を眺めていると、どこからか声がします。「何だ、無人販売で、お客が来ると、自動的に音声が出るんだな。ハイテクな花屋だ。」と感心しながら、花選びを続けていると、なにやら、視界の上から黒いものが…。

何と、天井から、店主の足が伸びているではありませんか。この店主、屋根裏スペースで店番をしていたのです。写真からは想像できにくいですが、ロフトのようなスペースが上にあり、そこで客が来るのを待っているのです。商売っ気のない店主だな、と思いましたが、何と、このおじさん、凄いです。私が、あれとこれとと指さして選んだ花を持って、店外に出ると、机に並べ、一本ずつ長さを調整しながら、**花束を作り始めたのです。花の色、咲き具合、花のボリュームのバランス等に気を配りながら、一人でゆっくりゆっくり花束をつくっていきます。**店主には失礼ですが、**やる気のなさそうな外見とは裏腹に、とても繊細で、器用な手つきに、ただただ見とれ、花束ができあがるまでのおよそ30分間、じっと見入ってしまいました。**花束があまりにも綺麗だったので、思わず、子どもと記念写真を撮りました。

まだまだ、お伝えしたいことはありますが、紙面の都合上、次回に持ち越ししたいと思います。

## ◆イランの祝日について

日本ではこの時期、祝日が重なり休みが続きますが、イランでは長期連休はありません。しかし、年に10数回、イスラム教の歴代の指導者の命日や殉教日などが、祝日になっています。ちなみに、5月7日は、「フェイテ命日」という祝日で、会社や学校などはお休みになります。

～次回配信は、5月10日頃の予定です。～



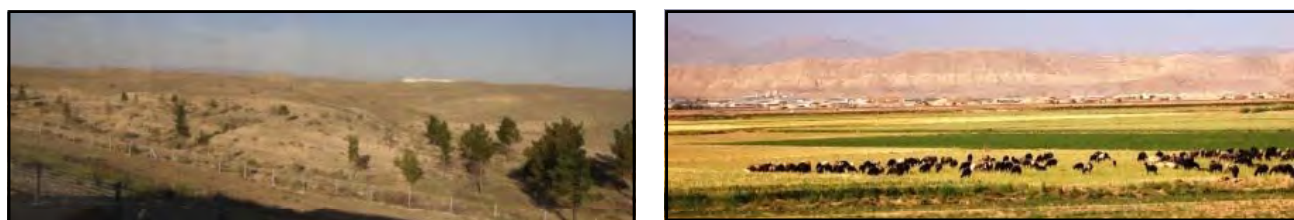
# باد از تهران

～ テヘランからの風 ～ 第3号 5月15日配信

5月も早いもので、はや10日が過ぎました。日本では、ゴールデンウィークが終わりましたね。伊里中学校の中庭のハナミズキの花は、もう満開になりましたか？3年生は、もうすぐ修学旅行。2年生も神戸研修が目前に迫ってきましたね。

前回の配信で、「(テヘランにも)もうすぐ、厳しい暑さが訪れることでしょう。」と書きましたが、実は、まだ、過ごしやすい日が続いています。テヘランは、日本と違って湿度が低い(だいたい30%くらい)、あまり暑さを感じません。日差しはジリジリと肌を焦がしますが、木陰に入るととても涼しく感じます。日本では、雨が降るとジメジメしますよね。数日前、4月以降初めて、通勤の時に傘をさしました。雨は、この時期に、わりと降りますが、全く不快さを感じません。日本と同緯度なのに、そして、標高1500mくらいなのに、不思議ですね・・・。

さて、今回は、5月5日の旅行のことをお話しようと思います。



↑テヘランから少し走ると、砂漠が・・・。(左)土と岩だけの単調な風景が続くが、緑の多い所もあり、そこには羊の群れが。(右)

5日に、テヘラン在住の日本人、そして、日本が大好きなイラン人たちとともにバスに乗り、テヘランから南に200kmくらい離れた「カーシャン(KASYAN)」という町に行きました。この旅行は、先の東北関東大震災のチャリティイベントとして企画されたものでした。

テヘランはイランの首都で、人口も多く、高層ビルがたくさんあるとお話ししましたが、ひとたびイランを出ると、そこは、木もまばらな、土と岩の砂漠が広がっていました。ただ、全く緑がないかという、そうではなく、高い山からの雪解け水が地下水となり、その地下水を使って小麦などの栽培をしている地域が点在しています。

バスに揺られること約3時間で、目指すカーシャンの町が見えてきました。ここは、今から400年くらい前(日本で言うと戦国時代)に、イランを統治していたアッバース一世がこよなく愛した町で、シャー(王)はこの町の郊外に、お気に入りの庭園を造らせました。また、死後もこの地にいたいと願い、霊廟(お墓)があります。



ここカーシャンには、高層ビルもなければ、大きな建物もない、いわゆる田舎町です。しかし、イランでは、どんな小さな町にも必ずモスク(イスラム教の礼拝堂)があります。日本が、古来より仏教を中心とし、町の中に必ずお寺があり、お寺を中心に町が広がっていったのと同様に、ここイランでも、町にあるモスクを中心にバーザール(市場)が広がり、市街地がその周りに広がっているといった町のつくりになっています。

毎週金曜日は、イスラム教徒にとって礼拝日。朝から、モスクに行き、聖地メッカ(サウジアラビア)の方角に向かって祈りを捧げます(異教徒はモスクに入れないため、モスクは外観のみですが、運良く(?)庭園で礼拝中の方に出会うことができ、許可をもらった上で撮影をしました)。



ここカーシャンで私が最も印象的だった光景は、子どもたちの澄んだ瞳でした。先ほど書いた、シャー(王)がつくらせた庭園(フイーン庭園)に行く時のこと。庭園の前でバスを降りようとしたのですが、渋滞でしばらく車内で待っていました。バスの横には小さな公園があり、滑り台などの遊具がありました。そこに多くの(おそらく遠足で来た近くの小学生でしょう)子どもたちが遊んでいました。日本人を見るのがとても珍しかったのでしょ。どの子も

無邪気な顔で、こちらを見て、しきりに手を振っています。そして、ペルシャ語でいろいろと話しかけてきます。ハッキリとは分かりませんが、おそらく、「どっから来たの?」などと、尋ねていたのでしょうか。すごく気さくで、誰に対しても親しく話をするイラン人の国民性は、幼い頃から培われてきたのだとしみじみ思いました。そして、いろんなことに興味をもつ探究心もこのようにして養われていくのだなと感じました。



ツアーに参加した16歳の高校1年生。ただ今、日本語勉強中!!

フイーン庭園は、ここが砂漠の中にあるのを忘れるくらい、水と緑の豊富な庭園でした。地下水が豊富なため、緑を保つことができるそうです。そして、庭の中の水路の至る所から水がわき出ていました。暑い中、涼を得ることができた場所でした。なるほど、歴代の王が気に入った理由も分かります。



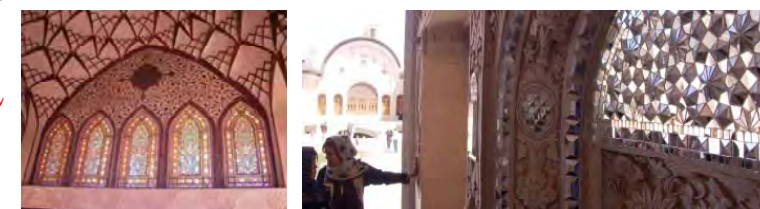
カーシャンのもう一つの見所は、絨毯づくりで富を築いた人(タバータバーイー氏)の家



(写真左)です。ここは、すべての建物・部屋が左右対称につくられています。また、夏の暑さをしのぐため、地下に部屋をたくさんつくったり、水をうまく使った庭のつくりをしたりしています。また、ステンドグラス(写真下左)や天井、壁の装飾(写真下右)がとても見事で、細かなデザインを創りあげた当時の職人たちの腕に脱帽しました。

歴史的建造物はまだ数軒しか見ていませんが、イスラム建築は、微妙なカーブが特徴的だと思います(建物の多くは、アーチ型やタマネギ型のカーブが多いです)。家の近くではあまりお目にかかれませんが、このように地方に行くと、昔ながらのつくりの建物を見ることができるので、とても新鮮です。

～次回配信は、5月末の予定です～



# باد از تهران

～ テヘランからの風 ～ 第4号 5月31日配信

伊里中学校のみなさん、こんにちは。今、中学校では、体育会練習真っ只中ですね。連日、競技練習やソーラン節、行進、パネル作成・・・と、時間がいくらあっても足りないのではないのでしょうか。

わたしの勤めるここテヘラン日本人学校でも、先日27日(金)、運動会が行われました。伊里中学校と同じく、全校児童生徒が声と動き、心を一つにして踊る、ソーラン節がありました。小学1年生から中学3年生まで、32人と、教師7人の39人の演技に、集まった観客、保護者の方々から温かい拍手がおくられました。皆さんも、今週末に迫った体育会で、地域の方、保護者の方、先輩方から「今年の伊里中はすごいぞ!!」と思ってもらえる競技・演技・行進をやってもらいたいものです。風の便りで体育会の感想が聞こえてくるのを楽しみにしています。



さて、今回は、イランの食生活についてお話ししたいと思います。と言っても、わたしはイランに来てまだ2か月弱。1週間のうちの5日間は、学校と家の往復で、朝夕は日本から持ってきた調味料をベースに妻がつくる日本食。お昼は、これまた、日本の調味料がベースのお弁当。ということで、イランの食事に触れる機会はまだまだ少ないのですが、週末に何度か訪れたイラン料理店でのメニューと、妻がいつも買い物をしているお店(イランではマガゼと言う)について紹介します。

## ◆肉料理が基本のイラン料理

イランは、南をペルシャ湾、北をカスピ海に面していますが、基本的には肉料理中心のメニューです。イスラム教国家なので、イスラム教の教え(戒律)により食べられないものがあります。それは、「豚肉」。日本では、トンカツやハム、ラーメンのスープやチャーシューなどで身近な食材ですが、イランでは、手に入りません。しかし、その代わり、日本ではあまり食べられていない、羊の肉がよく食卓に上ります。イランの伝統的な肉料理は、串刺しにした鶏肉や羊肉を丸焼きにしたもの(ペルシャ語でケバブ)です。お店によって、味付けは多少異なりますが、とてもおいしいです。イラン料理店に行くと、まず、

(左から)若鶏肉(ジュジェケバブ)、羊つくね風肉(クビデケバブ)、鶏煮込みとゼレシュク(パーベリーの実)ご飯

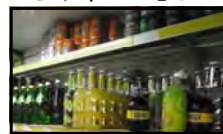


ケバブの肉の種類・本数を注文します。若鶏肉は、ジュジェ、羊肉をミンチにしたものはクビデなどです。そして、本数もペルシャ語で言います。数字の1は、イェキ、2はド、3はセです。一般的にはこれに、ナンと、なぜか生タマネギ(1/4)がつけます。お好みによってライスやサラダ、ジュースやノンアルコールビールを注文します。そうです。先ほど書いた、イスラム教の教えでもう一つ口にしてはならないものがありました。それは、「アルコール」つまり、ビールやウィスキー、ワインなどのお酒です。イスラム教の戒律が厳しいイランでは、アルコールはご法度。国内でつくったり、国外から輸入したりすることは、法律で禁止されています。その代わり、町のお店には、数多くのノンアルコールビールが売られています。試しに飲んでみましたが、日本のビールと味はほとんど変わらず、とてもおいしくいただけました。ただし、酔うことはできませんが・・・

ジュース類に混じって、いろいろな種類のノンアルコール飲料が並ぶ→

## ◆色とりどりの果物、野菜

日本のスーパーマーケットの野菜・果物コーナーに行くと、日本各地、世界各国から取り寄せられた様々な果物・野菜が所狭しと並んでいます。みなさん、イランのスーパーの野菜売り場は、どんな光景を想像しますか?? 実は、日本と同じか、それ以上に色とりどりの野菜や果物が並ん



①店の入口で料理を注文すると、ペルシャ絨緞のしかれてあるところへ案内されます。そこにビニールを敷き、飲み物とナン、生タマネギがてぎわよく置かれ、料理が来るのを待ちながら会話をします。  
②やがて料理が大皿で運ばれ、③みんなでいただきます!!

でいるのです。これには、びっくりしました。イランは、前にもお話ししたように、砂漠だけの大地ではなく、日本と同じように四季のはっきりしたカスピ海地方、テヘランなどの高原、そして、雪が多く降る山岳地帯と、多様な気候が同居する国です。だから、日本では夏にしか見ることができないような果物が春先に店頭で並ぶこともあります。また、日本では、「旬(しゅん)」という言葉があまり聞かなくなり、いつでも同じものが食べられますが、ここイランでは、季節ごとに店頭で並ぶ野菜や果物が微妙に違い、植物の「旬」を感じるができます。



(左から)ミニトマトもぎっしり/4月にスイカ? /うちの野菜、うまいよ! /原色が並ぶ/生アーモンドを(緑)発見

上の5枚の写真は、4月にテヘランに来て、1週目、2週目の週末に訪れたお店の様子です。4月の半ばだというのに、スイカが並んでいました。しかも、中まで真っ赤な完熟スイカです。これ、いくらだと思います? 何と、一玉およそ70,000リアル!! と言っても、ピンと来ませんよね。お金については、また、後日の配信で詳しく紹介しようと思っていますが、だいたい、数字が「円」の120倍です。つまり、70,000リアルは、日本円でおよそ600円くらいです。どうです、安いでしょう・・・そして、これが、とても甘くてみずみずしい!! 他にもオレンジや、キウイ、メロンなども、日本よりも安く、そしておいしいと評判です。果物のありがたみを感じる瞬間です。

果物だけではありません。野菜も新鮮でおいしいです。イランに来るまでは、「野菜には農薬がたくさんかかっていて、野菜専用の洗剤で洗わないといけな。」といった話を聞き、身構えたものですが、実際にお店で手に取ってみると、全くそんな様子はなく、葉物野菜はとても青々としています。これには、秘密があって、土がとっても肥える自然の肥料を使っているからだそうです。さて、何でしょう?? (日本でも、ずっと前は使っていたんですよ。)キュウリ、トマト、ナス、ピーマン(パプリカ)など日本でもおなじみの定番野菜はもちろん、日本のように丸くない、イラニーレタス(第2号で先生の息子が持っていた葉っぱ)や超特大のセロリなど、日本ではあまり見かけない野菜も店頭で並んでいて、どれを買おうか、妻も悩んでいるようです。

わたしの住む家から、徒歩5分圏内にマガゼが4件ありますが、それぞれ扱っている野菜や品物が少しずつ異なり、メニューに合わせてお店を使い分けています。また、店によってもサービスや得意とする商品が異なり、おまけしてくれるお店、野菜が新鮮なお店、お肉の種類が豊富なお店など、お店の良さを競っているようです。お店の広さは、だいたい日本のコンビニの半分程度。そこに、多種多様な商品が天井近くまで並んでいる様子は、圧巻です。ほとんどがイラン産の商品な中、発見しました! 我々が日本を代表する栄養ドリンク! イランでも、同じ名前が売っていて、親しみを感じちゃいました。

まだまだ、イラン生活初心者で、イランの食文化の奥深さを全く知りませんが、これから、新しい情報を入手したら、お伝えしていきたいと思っています。



(左から)カートを使ってお買い物/ジュースもほら、この品揃え/肉コーナーで今晚のお肉の品定め

次回配信は、6月10日頃。イランの誇る世界遺産「イスファハン」の予定です。

# باد از تهران

～ テヘランからの風 ～ 第5号 6月10日配信

伊里中学校のみなさん、こんにちは。体育会、お疲れ様でした。例年よりも早い梅雨入りで天気心配されましたが、無事、練習ができ、大変すばらしい体育会になったようですね。優勝した3年A組のみなさん、おめでとう。準優勝の3Bのみなさん、悔しい思いを、合唱コンクールにぶつけるべく、クラスの団結力をさらに高めていってください。2年生、1年生のみなさん、先輩たちから良き伝統を受け継ぐことが出来ましたか？ 地域の人や保護者の人に最高の姿を見せることが出来ましたか？ 体育会で盛り上がった気持ちを是非、持ち続け、さらにすばらしい伊里中学校をつくってってください。

さて、6月に入り、テヘランは最高気温が35度近くになり、とても暑い毎日が続いています。天気は毎日ほぼ快晴です。日本人学校では水泳学習も始まりました。先生も子どもたちとともにプールに入り、泳いでいます。1年生の皆さん、水泳は始めましたか？



今回は先日の休みに訪れた、イランが世界に誇る世界遺産の町「イスファハン」についてです。

## ◆”イスファハン・ネスジェ・ジャハーン”



イスファハンの町は、テヘランから南におよそ400km南に行った、イランのほぼ中心に位置する町です。イスファハンの歴史は古く、すでに7世紀（日本では飛鳥時代の頃）には人が住んでいたそうです。といっても、戦争のための野営地。こちらの言葉で「セパーハン」「アスパハン」と呼ばれていたそうです。今の「イスファハン」の由来です。意味は、「軍隊の地」。しかし、歴史の中心となるのは、16世紀後半（今から500年近く前。日本では信長・秀吉の生きた時代）だそうです。なぜなら、イランで興ったサファ

ヴィー朝の王様であったアッパース一世がここを首都と決めたからです。王は、自ら都市の設計をしました。エマーム広場を中心に、宮殿やイスラム教寺院、バーザール、橋など現在も残る壮大な町並みを造り出していきました。絹の輸出を中心に経済も発展し、ペルシア芸術も開花しました。町には世界各地から多くの商人が訪れ、繁栄をきわめたと言われています。当時、ヨーロッパからイスファハンを訪れた商人や外交使節は、「イスファハン世界の半分（イスファハン・ネスジェ・ジャハーン）」という言葉を残したと言っています。これは、王のつくった都市に対する最大級の賛辞（ほめ言葉）であり、現在訪れても、よく、こんな場所をつくったな、と感動させられます。

## ◆縦510m、横163mの壮大な眺め

イラン国内の移動には、バスや鉄道もあるが、今回は快適に空の旅。日本と違い、イランでの飛行機移動はとてりずナブル。大人片道3500円くらいだ。イランのフラッグシップ・キャリア（国を代表する飛行機会社）であるイラン・エアはテヘランから国内の様々な都市に乗り入れている。トラブルや機材の老朽化などちょっと不安はあるが、そんな心配を感じさせない快適な空の旅だった。



私たちは、6月2日午後、テヘランから飛行機でおよそ1時間の町イスファハンに着いた。イスファハン空港からチャーターバスで30分くらいで、目指すエマーム広場のわきに到着した。

広場を目指し、バスを降り、歩く。少しずつ、人の喧騒が聞こえてくる。観光馬車の鈴の音が聞こえてくる。そして、一気に視界が開ける・・・縦510m、横163m。周りを2階建ての回廊に囲まれ、正面にはモスクのドームがドーンと迫ってくる。首を右に振ると、イランで最も美しい装飾をもつと言われるマスジェド・エマームの全景が太陽の光に照らされていた。

ここには、イランのイスラム芸術の集大成であり、イスラム寺院建築の傑作であるマスジェド・エマームの他に、「壮大な門」を意味するアーリー・ガープー宮殿、王様専用のマスジェド（モスク）であった、マスジェド・シェイフ・ロトゥフオッラーなど、当時からほとんど変わっていないとても美しい歴史的建造物が目白押しだ。上から、下から、そして横から建物や、タイル装飾を見ると、当時、これらの建物を造らせた王の偉大なる権力と、緻密な技術を持つ職人の、卓越した技に脱帽する。そして、これらの技術は現代にも受け継がれていることを、ほどなく知ることになる・・・。



↑(左から)ドーム内側の装飾/鍾乳洞状の装飾/壁にはイスラム教の教え(コーラン)が/広場は憩いの場/礼拝中

## ◆ペルシア芸術の粋をみつめた工芸品の数々

エマーム広場の回廊内には、数々のお土産屋さんが軒を連ねていた。古来よりイスラムの町には、どこでも3つの施

設が必ずつくられていたという。1つは浴場。これは、神に祈りを捧げる前に、自らを浄めるため。そして、祈りを捧げるモスク。もう1つは、祈りを捧げた信者が働くための仕事場＝バーザール(市場)。現代は浴場こそ姿を消しているが、モスクの側には必ず、バーザールがあり、観光客から地元のおじいちゃん、おばあちゃん、子どもたちまで古今東西の老若男女が集い、活気に満ちている。

ここで売られているものは実に多種多様。靴や洋服などの日用品もあれば、香辛料やおもちゃ、布切れなどを置いている店も軒を連ねている。しかし、私たちのお目当ては、ペルシア芸術の数々。中でも、モスクと同じ青を基調とした、細かい装飾が銅の皿や器に描かれているミーナ・カーリー(写真左)。1点1点、職人による手作業だ。それから、猫の毛でつくった筆を使い、細かい線まで巧みに描く細密画。銀や銅などの金属を素材にレリーフを施したガラム・ザニーの店は、きらびやかだ。ペルシアと言えば定番のペルシア絨毯の店も数多くある。このように、イスファハンのバーザールには、500年前にこの広場をつくった当時の職人の技が脈々と受け継がれ、現代に息づいている。日本にも優れた芸術作品・伝統工芸品があるが、イスラム教の世界観に基づく工芸品には新鮮さを感じ、時間が経つのも忘れて見入ってしまった。



さらさ  
↑更 紗のテーブルクロスを購入



## ◆日が陰ってからが・・・

イランの夏は暑い。これは、この通信で何度となく書いた。ここイスファハンも、昼間の太陽は肌を刺す。イランの人は、昼間はあまり外出せず、陽が西に傾き出す午後6時半くらいからぞろぞろと外出する。次の日がお休みなら、なおのこと。家族で自動車に夕食の用意を積み込み、近くの公園に繰り出し、そこで夕食が始まる。日本では、春に桜の下でお花見をするが、似ている。太に沈む午後7場の芝の上でスイカはまだ早い。食前に果物聞くと、「夕食べて、糖분을補給することで、夕食の食べ過ぎを防ぐ。」のだとか。イラン式健康法である。日も暮れ始めた頃、ふと見渡すと、広場は思い思いの時間を過ごす家族連れや、友人たちのグループでいっぱいになっていた。私たち日本人のグループが珍しく、いろいろな人が声をかけてきたり、一緒に写真を撮ってくれとせがんだり…。ここがイランであること、私たちが、日本では「危ない国」と言われている国にいることを完全に忘れた瞬間だった。人間どうしの、人種や言葉を越えたつながりの素晴らしさを感じる、至福の時間だった。



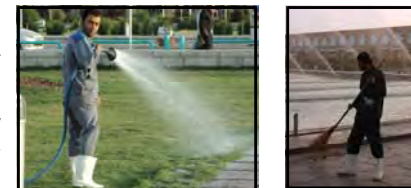
そんな雰囲気陽が回廊の向こう時頃。私たちも広に絨毯をひき、みを食べた。夕食にイランの人は、夕を食べるそう。の前に果物を食

## ◆夜のざわめきと対照的な静寂の朝

翌朝、もう一度広場の姿をこの目に焼き付けたいと思い、朝、早起きして広場に向かった。時間は午前6時過ぎ。前夜の、人であふれかえっていた広場の朝はどうだろうか。期待に胸をふくらませて、ホテルから10分歩く。広場に入り、しばし、歩をとめた。耳に聞こえてくる音。それは、噴水の水が水面に落ちる音。天高く、鳥がさえずる声。あとは、何も聞こえない。前夜の喧騒が嘘のように、静まりかえった、静寂の広場がそこにはあった。ぐるっと一周してみる。日本とは何かが違う。何が違うのだろう。しばらく考えて、気がついた。ゴミが落ちていないのだ。石畳、芝、路地。どこを見ても、ゴミがない。イスファハンの町は、とてもきれいだった。世界に誇るエマーム広場は、「世界一美しい！」と信じてやまないイラン人が多数いる。その広場は、多くの人たちによって支えられている。毎朝、観光客が訪れる前から、芝にたっぷりの水をあげている人。ほうきでゴミを集め、美しい町をより美しく保とうとしている清掃の人。ほこりが立ちにくいように、道路に水をまいている人。それぞれが、それぞれの持ち場でイスファハンのために、仕事をしている。早起きして、歩いてみると、普段は見られない光景に出会うことができる。



ほうきでゴミを集め、美しい町をより美しく保とうとしている清掃の人。ほこりが立ちにくいように、道路に水をまいている人。それぞれが、それぞれの持ち場でイスファハンのために、仕事をしている。早起きして、歩いてみると、普段は見られない光景に出会うことができる。



## ◆他にも見どころいっぱい

エマーム広場を中心に書いてきたが、イスファハンには、たくさん見どころがある。紙面の都合で、写真が載せられないが、イランの寺院建築の傑作といわれるマスジェド・ジャーメヤ、ゾロアスター教の神殿など、ビルの多いテヘランでは見ることの出来ない遺産に数多くふれることが出来た。イランの歴史の深さ、人々の優しさや真摯な姿をたくさん見つけることが出来た2泊3日の旅だった。 ～次回配信は6月末の予定です～



# باد از تهران

～ テヘランからの風 ～ 第6号 6月30日配信

テヘラン  
日本人学校

伊里中学校の皆さん、こんにちは。中学校の周りの田んぼには水が張られ、田植えの時よりも稲が生長し、蛙の鳴き声が騒がしい6月末を迎えていることと思います。梅雨真っ只中で、ジメジメと蒸し暑い毎日が続いていることでしょう。

テヘランも、6月の半ば頃からとても暑く感じられるようになりました。水泳学習の前に気温を測ると、午前10時半で32度、午後2時には39度を超える日も珍しくなくなりました。山に積もっていた雪も溶け、いよいよ灼熱の夏がすぐそこまでやってきているようです。



↑6月中旬。山の雪は溶け、芝生が太陽に照らされる…学校の近くのスポーツ公園にて

今回は、私が勤務する、テヘラン日本人学校(正式名称は在イラン日本国大使館附属日本人学校)について紹介します。

テヘラン日本人学校は、今から43年前の6月8日に、「在イラン日本国大使館附属日本人小学校」としてイランの首都・テヘランの地に開校しました。先日6月8日に、開校記念日がありました。その日の全校朝礼で、校長先生から子どもたちにテヘラン日本人学校のあゆみと歴史の話がありました。

最盛期には300人近くいた在校生も、イスラム革命やイラン・イラク戦争の勃発、最近のアムリカ合衆国との関係悪化などにより、数が減っていき、6月27日現在の在校生は34名となっています。今後も、児童生徒数の減少が心配されています。

テヘラン日本人学校には、日本の小学校・中学校と同じように日本語を話す子どもたちが学んでいます。日本企業の駐在員(商社や報道関係、JICAなど)や、日本大使館職員の子どものおおよそ7割、イラン人と日本人の親をもつダブルの子どもたち(ハーフという言葉は、最近では使いません。)がおおよそ3割くらいです。どの子どももみんな明るく素直で、異国の慣れない環境でも、学校生活を力いっぱい楽しんでます。



## ◆小さな校舎、でも整備された施設・設備



岡山県下でも指折りの大きな校舎、大きなグラウンドをもつ伊里中学校と比べると、テヘラン日本人学校の校舎・校地はとても小さいです。校舎の大きさは、緑陽会館くらい。治安・防犯面から、外見はとても学校とは言いがたい、何の変哲もない建物です(写真左)。オートロックの扉を開けて入った先に「テヘラン日本人学校」の看板があります(今号のタイトル右のプレート)。

ここは、もともと住宅だったものを学校用に改装したようで、建物の中心に1階から2階に上がる階段があり、下には保護者の待合などに使うロビーが、2階には多くの本が並んでいます。ちょうど今は、運動会のために子どもたちが描いたポスターが飾られています。

各教室は冷暖房完備で、白い壁の明るい間取りになっています。私の担任している小学56年教室は、児童が11名なので、ちょっと狭い感じもありますが、ここで毎日いろいろな授業を教えています(小5算数、小5～中3社会、小3～中3体育、小56家庭などなど)。テヘラン日本人学校には体育館がないので、入学式などの行事、集会などは2階にある講堂で行います。全校児童生徒が入っても余裕の広さです。各教室からすぐにあるため、移動はとても便利です。

小さな校舎ですが、設備は日本の学校と同じように、一通りのものは揃っています。理科の実験道具や音楽の楽器などは、日本よりも充実しているかも？

職員は、私のように日本の小学校・中学校から派遣された先生が7名います(うち校長先生が1名)。現地スタッフとして、イラン人の人が5名、非常勤スタッフとして英語とペルシャ語の先生が計5名の17名です。日本人スタッフはみんな男性で、日本で教師経験豊富な先生ばかりです。岡山県出身は先生だけで、あとは、茨城県、埼玉県、東京都、千葉県、大阪府、長崎県出身の先生です。校長先生と、大阪、長崎出身の先生は、私と同じく4月からテヘラン日本人学校に勤務することになった先生たちです。



↑(左から)担任する56年教室/蔵書量は日本以上?/1階から2階への階段付近/本校の校章/4月の着任式の様子/宜しくお願ひします

## ◆テヘラン日本人学校の1日



(左から)体育の授業のストレッチ/休み時間は小学生から中学生までみんな校庭で遊ぶ/お昼の弁当、おいしいよ!/みんなで一輪車練習中

テヘラン日本人学校は、午前8時15分からスタートします。日本との時差が4時間半あるので、日本時間でいうと、ちょうど4時間目が終わって、給食が始まる時間ですね。朝の会、朝の学習に続いて、1時間目が始まります。授業時間は、小学生も中学生も45分となっています。2時間目が終わると20分間の中休み(業間休み)があります。まだ、それほど暑くない時間帯なので、多くの子どもたちは校庭に出て、思い思いの遊びをします。最近は、「こおりおに」や「けいどろ」、テレビでもやっている「逃走中」がはやっています。一輪車を練習する子どもたちも大勢います。校庭もとても狭いですが、小学1年生から、中学生まで、仲良く遊んでいます。その後、3時間目、4時間目と授業を受けた後、お昼休みになります。テヘラン日本人学校には、給食がありません。子どもたちは、家から弁当を持ってきたり、学校近くのファストフードのお店やイラン料理のお店にデリバリー(宅配)をお願いしたりします。昼食を食べ、少し休憩したあと、全校で10分間の掃除します。この掃除では、縦割りの班をつくり、1週間交替で隅々まできれいにします。テヘランの街は、とてもほこりっぽく、しかも、校舎内を土足で歩くため、毎日のようにたくさんの土ほこりが出ます。毎日の掃除は欠かせません。午後の授業の前に終わりの会をします。私の学級では、1日のめあての反省をしたり、1分間スピーチをしたりしています。その後、午後の授業になります。午後の授業が終わるのが、3時15分。日本では、午後8時前ですね。このあとは、放課後になります。日本の中学校のように部活動がないため、こ



(左から)全員で教室を掃除/小さいバスケットもある/小6社会パソコンで調べ学習/小5算数直方体の学習/小56家庭基礎ぬいの練習

こでも子どもたちは、下級生から上級生までほとんどが校庭で遊んでいます。外はかなり暑いですが、へっちゃらのようです。そして、午後4時30分が最終下校時刻となります。テヘラン日本人学校では、子どもたちの安全確保のため、保護者の方に送り迎えをお願いしています。家が学校から遠い児童生徒も多く、また、交通渋滞が日本の比ではないため、通学は一苦労です。長い人は、片道1時間半近くかけて通っています。公共のバスを使って登下校している人もいますが、ほとんどは、ドライバーさんの運転による自動車通学です。そのため、午後4時以降は、1階ロビーはお迎えの保護者の方でいっぱいです。毎日、おうちの方と顔を合わせることができるのは、私たち教師にとって、とても恵まれていることです。子どもたちは1日の出来事を友だち同士で話しながら、名残惜しそうに学校をあとにします。そして、ここから私たち教師の職員室での仕事が始まります…。(ちなみに休日は、イラン全土が休みとなる金曜日と、木曜日(土曜日)です。)

## ◆運動会は、子どもたちも保護者も本気!

テヘラン日本人学校を代表する行事に、運動会があります。運動会は、5月27日(伊里中学校の体育会の1週間前)に行われました。子どもたちは、紅組、白組に分かれ、多くの種目に全員が出場します。種目には、応援合戦やソーラン節、綱引きなど、日本らしさを生かした演技・競技や、ナン食い競走などイラン特有の競技などがあります。また、2人3脚など、親子が力を合わせ競技も多数あり、保護者の方も本気です。当日は、日本国大使館の大使も来賓として来られ、子どもたちの頑張りと日本人の交流の様子を見てくれています。



(左から)保護者競技は白熱/全校で踊るソーラン節。法被姿でポーズ/うまくナンに食いつけるか/応援合戦とエール交換で気合いを注入!

## ◆テヘラン日本人学校伝統の夏祭り、チェナール祭り

つい先日行われた、PTA主催の夏祭りがチェナール祭りです。チェナールとは、テヘランでよく見られる街路樹です(学校前に植えてある木。葉の形は校章のデザインに)。このお祭りでは、子どもたちはフェイスペインティングをしたり、いろいろなゲームに挑戦して景品をもらったりします。また、学校外の、日本人会のメンバーにとっても交流の場となり、たくさんの日本人の方たちで盛り上がりました。私も、フェイスペインティングで、仮面ライダー1号に変身しました。ちなみに、とりにいるのは6年生の男の子で、仮面ライダーダブルに変身しています。



～次回配信は7月10日頃の予定です～

# باد از تهران

～ テヘランからの風 ～ 第7号 7月9日配信

伊里中学校の皆さん、こんにちは。待ちに待った夏休みまで、あと10日になりましたね。1学期はどんな学期でしたか？宿泊学習、体育会、定期テスト…。3年生は部活動の総体もありましたね。あと少しとなった1学期を頑張ってください。

ここテヘラン日本人学校も、7月22日から、夏休みになります。子どもたちの多くは、日本に帰り、おじいちゃん・おばあちゃんと会ったり、旅行に行ったりするそうです。こちらで学ぶ子どもたちにとって、親戚の人と会い、元気な姿を見せるのも夏休みなどの長期休暇ならではのようです。

さて、今回は、1学期最後の配信ということで、テヘラン暮らし3か月間に見つけた、ちょっと変わったもの・珍しいものの特集です。これまで、休みの日などに買い物や散歩に出かけました。こちらでは、自動車を運転することができない(交通マナーが悪く、自己の危険性が高いため、職員は許可されていない)ので、もっぱら移動手段としては徒歩、バス、電車(地下鉄)となります。街を歩いていると、日本とはちょっと違った風景に数多く出会います。「へえ～っ」と感心したり、「何これ??」と首をかしげたりするものもたくさんあります。それらをいくつか紹介します。写真から、私の暮らすテヘランの雰囲気を味わってください。

## 1. ある意味芸術的…街のあちこちに絵が

街を歩くと、そこかしこに絵が描かれています。大きなものは、ビルの壁一面を使ったもの、小さなものは、歩道脇にある配電盤のようなものなどです。注目すべきは、その精巧さ。とても壁に描いたとは思えないくらい、立体的で奥行きがあり、芸術的です。絵のテーマは、イスラム教の教えに関するものや、イランの体制に関するもの、指導者を崇拝するものなどが多いですが、景観とマッチした風景なども見られ、よくこんな絵を描いたなあと感じさせられます。



## 2. バスは男女別、地下鉄は男女混合

イスラム教の教えでは、男性と女性の区別がはっきりなされています。それは、区別というよりも、むしろ、差別といった方がいいのかも知れません。学校は、小学校からはすべて男女別の学校となります(日本人学校のように、外国人の通う学校には、この規則は適用されていません)。また、男女が同じ空間でスポーツをすることも禁止されています。このような中、公共交通機関であるバスにも、この規則は適用されます。同じバスでも、男性は前、女性は後ろというように、乗る場所が決まっています。そのため、下の写真のバスのように、バスには入口が2つあるものも多いです。私たち家族3人がバスで出かける時は、妻は後ろの車両に乗り、私は前の車両に乗ります。幼児は、そのような規則がないので、その日の気分で前に乗るか後ろに乗るかを決めるようです。しかし、不思議なことに、



同じ交通機関である地下鉄や飛行機には、この規則はありません(飛行機では、搭乗ゲートのみ男女別でした)。バスだけが、厳格なのです。



↑バス停(道路の真ん中!)でバスを待つ。左は、バス専用レーンです。

↑連節バスは座席も多く、エアコンが効いていて夏

は涼しく快適です。

## 3. ここはイスラム教徒の国

2. でも書いたように、イランはイスラム教シーア派の国。毎日、決まった時間になると、モスク(教会)から礼拝を呼びかける放送(アザーン)が聞こえます。熱心なイスラム教徒は、毎日メッカの方角に向かい、礼拝を行います。でも、住み慣れた家でなければ、どちらがメッカの方角か、分かりません。また、外出先で、その時刻になった場合、どうすればよいのでしょうか。私たち日本人には想像できませんよね。その点、イスラム教の国では、そのような配慮もしっかりされています。電車の駅や空港には、「Prayer room (礼拝所)」が備えられています。また、ほとんどのホテルの客室には、どちらがメッカの方角を示す目印(キブラ)があります。これらがあれば、敬けんなイスラム教徒も迷うことはないでしょう。



もうすぐ、イランではラマザーン(断食月)が始まります。ラマザーンになると、イスラム教徒は、太陽が昇ってから、太陽が沈むまで、一切の食物を口にすることはできません。今年の断食月の入りは、8月1日ではないかと言われています(他のイスラム教国では確定していますが、イランは、最高指導者が決めた日が断食入りになるそうで、まだ決まっていないようです)。私も、断食に挑戦し↑部屋の角に掲げられていた

てみたいと思っています。  
イスファハン空港内の礼拝所↑

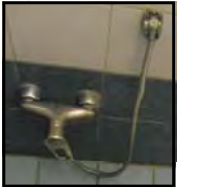


## 4. イランのトイレ事情



外国のトイレは、どうなっているのだろう?これは、私が中学生の時に、抱いた疑問です。小学校の時の担任の先生から、ソ連(現ロシア)に旅行に行った時に、トイレがおよそ日本とは比べものにならないくらい粗末で、困ったという話を聞いて以来、海外のおもしろいトイレを見たいと思うようになりました。まだ、数カ国しか見ていませんが、イランのトイレも、どんなのだろうとワクワクしていました(変な話だが)。

イランのトイレの特徴は、一言で言うと、シンプル。日本のように、至れり尽くせりの装備はありません。まず、紙がありません。日本でも、駅のトイレなど、一部には紙がないトイレもありますが、イランでは、家以外で紙があるトイレを見たことがありません。では、どうするのでしょうか。よく見ると、壁にホースのようなものがついています。これで、洗えというのです。あとは、自然乾燥。湿気の少ないイランならではの方法ですね。ちなみに、私は、外で用を足す時、イラン式の方法でやっています。「郷に入れば、郷に従え」を実践しています。このホースで、おしりを洗います→



## 5. 何かに似ている…これもイランの文化

テヘランの街中で、すれ違う人の服装を見て、「おや?」と思うことがありました。はじめは気がつかなかったのですが、男性の着ているシャツなど、よく見ると結構有名なブランドの服を着ているのです(女性はマントのようなものを羽織っていて、どんな服を着ているのか分からない人もいますが、女性にも多いです)。また、持っている紙袋や手提げ袋などにも、「グ〇チ」や「〇ルメス」などのロゴがデザインされています。ショーウィンドーにも、「ヴィオン」のバッグや「ロックス」の時計が展示されています。これらは、何を意味しているのでしょうか?右の写真から、想像してみてください。何かに気づきませんか?

(左)パズールで出会ったウ〇トラマンと仮

〇ライダー↑(右)動物園横の遊園地入口(U〇Jではないよ!)



## 6. フルーツをぜいたくに



夏が近づくと、街中のジュースやさんがにぎわいます。イランでは、豊富にとれる旬の果物をふんだんに使った、フルーツジュース(アープ・ミーヴェ)が人気です。左の写真のショーケースの中には、たくさんのメロンが見えます。このメロンをミキサーに入れてかき混ぜること数十秒。やがて、できたての生メロンジュースが出てきます(おじさんが右手に持っているもの)。これを飲んでみたところ、メロンの持つ甘さが口の中いっぱいになり、幸せになりました。写真右の機械は、オレンジを搾ってオレンジジュースを作る機械です。



上に乗っているオレンジが自動的に中を通り、そこで搾られて下にジュースとして出てきます。これも果汁100%。他にも、バナナやニンジン、はたまたセロリ100%のアープミーヴェもあります。街角のスタンドには、これらを求めてたくさんのお客さんがやって来ます。安くておいしいアープミーヴェには、これからもお世話になりそうです。～次回配信は、2学期始業式(9/1)の予定です～



# باد از تهران

～ テヘランからの風 ～ 第8号 9月1日配信

伊里中学校の皆さん、お久しぶりです。40日以上長い夏休みが終わり、今日から2学期がスタートしましたね。

皆さんにとって、2011年の夏休みはどうでしたか？しっかり遊べましたか？宿題はもう終わっていますよね！？

日本では、まだまだ残暑厳しく、連日暑い日が続いていることと思います。テヘランも日本に負けず、暑い日が続いていましたが、つい先日、珍しくほぼ1日雨が降りました。最高気温も18度くらいで、とても肌寒い一日でした。夕方になって雨は上がり、晴れ間がのぞいてきたのですが、家の窓から北の山を見ると…。何と、**山頂付近が真っ白に**。6月に完全に残雪が溶けて以来、岩肌をむき出しにしていた山に雪が積もっていきけるような青空で、空が、見事なコントラスト込んできました。まさ**で8月に雪を見ることも見なかった**ので、に屋上にのぼり、写こテヘランは乾燥帯大きいために気温の差も大きく、このようなことが起こるようです。珍しい体験でした。



た。翌日朝は、ぬの青と新雪の白ととなって目に飛びか、**ここテヘランができる**とは思っすぐにカメラを手真を撮りました。こ

さて、私は、イランで初めての夏休みを迎えました。日本人学校は7月22日から9月3日までが夏休みです。ということは、…。まだ、夏休みの最中です。いいでしょう。でも、これには訳があるのです。今回の「テヘランからの風」のテーマは、イスラームの国ならではの風習についてです。

## ラマダーンを知っていますか？

(通信7号では、**ラマザン**と表記しましたが、英語表記はRamadanなので、今後は**ラマダーン**と表記します)

イスラム教のしきたりや特徴的なことにはいろいろなものがあります。1学期に配信した「テヘランからの風」では、どんなことを書いていたか覚えていらっしゃいますか？

歴代の宗教家(エマーム)の誕生日や命日が祝日になっている。イスラム教徒は、毎週金曜日にモスク(イスラム教寺院)に礼拝に行く。1日に5回、祈りの時間があり、いつでもどこでも祈ることができるように公共の場所に礼拝所があったり、メッカの方角を示すもの(キブラ)があったりする。などをとりあげました。

他にもまだまだたくさんありますが、そのようなイスラム教の数多くのしきたりの中で、おそらく、日本人が一番知名度が高いのが、**ラマダーン(断食)**ではないでしょうか？

前回も書いたように、イスラム暦の第9月をラマダーン月と呼びます。この由来は、遠くムハンマド(イスラム教をひらいた人)までさかのぼるそうです。その昔、**イスラム教を開いたムハンマドが、神から啓示(お告げのようなもの)を受けたのを記念して始まった**とされ、これは、イスラム教の教典(教えをまとめた書物)「コーラン」にも書かれています。

ラマダーン月に入ると、日の出前の朝の礼拝から、日没後の夜の礼拝までの間、人々は一切の飲食・喫煙が禁止されます。

今年のラマダーンは、8月1日から入るとされていましたが、正式には8月2日から8月31日までとなりました。(イスラム暦は、太陽暦よりも年間11日ほど少ないため、ラマダーンの期間も年によってずれてきます。今年のように真夏の断食もあれば、真冬の断食もあります。)

**ラマダーンの目的は、断食をすることによって貧しい人への思いやりを育てたり、苦行を成し遂げた達成感をともに味わい、イスラム共同体の一員としての連帯感を養ったりすることにある**ようです。

ラマダーン期間中は、食品を販売するスーパーマーケットやパン屋などは営業しますが、**食事を提供するレストラン、ファストフード店、喫茶店などは、日中は営業をしません**(写真右)。日没後の午後8時30分に開店し、夜遅くまで営業するというパターンになります。ですから、われわれ異教徒にとって、外出した時の食事には苦労します。道端でパンをかじることも、ジュースを飲むこともできません。唯一開いているのは、ホテルのレストラン。旅行者が多く利用するホテルのレストランは、ラマダーン期間中でも例外的に開いていることが多いです。



↑日

中はご覧の通り

## ラマダーン体験記

せっかくイスラム教の国に来たんだから、何かその国の文化を身をもって体験したい！これは、イランへの赴任が決まってから、ずっと頭に思い描いていたことです。さすがに、イスラム教徒になることは容易

ではないので、せめてイスラム教徒が行っていることを見よう見まねでやってみようということで、**今年、私はラマダーン(断食)に挑戦しました。**



7月も終わりにさしかかると、街はラマダーンに備えていろいろな変化があります。まず、道路沿いなど目につくところに大きなぼりが立ちます(写真左)。イラン人に何と書いているか聞いたところ、「**恵みの月**」と書いてあるそうです。つまり、富めるものもそうでないものも、ともに恵みを与えるという意味で、ラマダーンの目的にある貧しい者への思いやりに通じるものがあるそうです。

それから、スーパーマーケットの多くで、**ナツメヤシの実(デーツ)が大量に売られる**ようになります。これもラマダーンと関係が深いのです。ラマダーン期間中は、朝ごはんを食べるから、晩ご飯を食べるまでの間、何も飲み食いできません。だから、夜になって、ご飯を急に食べると、おなかの調子をこわしてしまいます。そこで、毎日の日没後は、まずデーツを口にします。空腹に耐え、



↑デーツの実(左)とデーツのパッケージ

やっとな食べ物口にするので、ありがたみをかみしめながら食べます。デーツはとても糖分が多く、またカロリーが高いため、昔から食物が育ちにくい砂漠を越えて旅をする時の食事として重宝されたそうです。

私は、8月1日から11日間、ラマダーンを体験しました。当然、その間は平日は学校に行き仕事はしませんが、朝5時半頃に起き、6時過ぎの日の出前に朝ごはんを食べ終えます。その後は、家族が朝ごはんや晩ご飯を食べるのを見ても、学校で他の先生がお昼ごはんを食べているのを見ても我慢です。また、水も口にできませんので、のどが渴いても、水やお茶を飲みません。湿度が少ないので、口の中がとても乾燥します。その時は、うがいをして、口の中の乾きを抑えます。

仕事が終わって家に帰っても、日没の8時過ぎまで、再び試練が待っています。家族はラマダーンをしていませんので、6時過ぎに夕食時間帯となります。ともに食卓にはつきませんが、見ているだけ…。そして、やっとな日が沈んだ8時過ぎ。待ちに待った夕食時間となります。これほど、夕食を恋しく思ったことがあったでしょうか…。

はじめに口にするのは、決まってデーツです。そして、次にお茶か牛乳を飲みます。口の中に広がるデーツの甘み、そして、水分がのどを通して体の奥へ流れていくのが感じられます。その後、「今日も一日、お疲れさま。」と家族と会話を交わし、夕食を口にします。月並みな表現になりますが、普段と変わらない夕食が、とてもおいしく感じられました。ふだん、何の苦労もなく飲み水を手に入れることができ、また、お金さえ払えば何でも食べられる現代社会に生きている私たちにとって、水や食物がいかに大切で、また貴重なものであるかを考えさせられました。

それから、我慢する気持ちも少しは身についたように思います。便利な世の中に生きていると、ついつい、いろいろなことが我慢できなくなってきました。しかし、したくてもできない、やっとなはいけないという条件の中で生活してみて、「やれば結構出来るもんだな。」と思いました。

我が家では普通の夕食でしたが、イスラム教徒の断食後の食事は、どうでしょうか。断食後の食事を「イフタル」と言うそうです。街中では、日没を過ぎると、深夜未明まで、モスクの前や大きな広場などに特設テントが出て、無料で食事が振る舞われます。この時期だけお目見えするスイーツ(写真左)もあります。一日の苦行に耐えた分、リバウンドも大きく、多くのイスラム教徒はイフタルをドカ食いし、体重が増えてしまうとか…。



私は、結局、11日間しかラマダーンを体験できませんでした(12日からイラン国外に出たため)が、**ラマダーン前と今とでは、食事を含めた身の回りの様々なものに対する感謝の気持ちを前以上にもつことができるようになった**と思います。また、**大変なラマダーンを30日間やり遂げたイスラム教徒の人々を、私は尊敬したいと思います。**

## ラマダーンが明けた！

8月31日。イスラム教徒にとって待ちに待ったラマダーン明けの日です。30日に、正式に「31日のラマダーン明け」が発表されました。**ラマダーン明けから3日間は「イード・アル・フィトル」といって、お祝いのため、学校や会社は休みになります。**今年も、31日水曜日から9月2日金曜日までの3日間です。もともと、金曜日は休みですから、はじめの2日間が祝日になったわけです。(火曜日に政府より急きょ発表があって、決定したそうです。)今年の日本人学校の夏休みが9月3日までなのは、こうなることを見越してのことのようです。さて、イード・アル・フィトル(断食明けのお祭り)では、普段とどんな違いがあるのでしょうか。街に出ってみました。

まず、多くのお店が安売りをします。これは、日本や欧米で言うところの「バーゲン」のようなものでしょう





か。断食明けを祝って、商品を安売りするのです。私が行った大型スーパーでは、ほぼ全商品が10～15%OFFでした。店によっては、ショーウィンドウに「50%OFF」の文字が躍っているところもあります。それから、街のあちこちに、断食明けを祝う飾り付けやポスターが飾られます。国を挙げて、お祝いムード一色です。



また、ラマダーン期間中は、結婚式を行うことはできませんので、ラマダーン明け後の数日間は、結婚式がたくさん行われるそうです。結婚式で新郎新婦が乗る車には、ボンネットやドアに生花が飾られ、ひととき華やかになります。こういう車を多数見かけるのも、断食明けの特徴かもしれません。そして、3日間の休みが終わり、また、街は普段の表情を取り戻していくのです…。次回配信は9月20日頃。日本人学校の宿泊研修の様子をお伝えします。

(\*タイトル背景写真は、風力発電所近くのダム湖に沈む夕日。2日目の午後7時頃、トイレ休憩に立ち寄り、このような光景に出合っ



た。)

伊里中学校の皆さん、こんにちは。日本は、2週連続の3連休なんですね。夏休みが終わって、2学期が始まり、約3週間。そろそろ疲れがたまってきた頃に連休があるというのは、大人も子どももホッとするものではないでしょうか。でも、1・2年生にとっては、秋の地区総体が目前に迫っていますね。練習や練習試合が組まれ、なかなか休みもないのかな？3年生は、受験に向けて勉強が本格的になった頃ではないでしょうか。自由に使える休みを利用して、苦手分野の復習を頑張っていますか？

さて、今回お届けするのは、テヘラン日本人学校の宿泊学習(日本でいう修学旅行)の様子です。伊里中学校では、1年生が関谷研修、2年生が神戸研修、3年生が修学旅行と、学年によって目的地や活動内容が違いますね。日本のほとんどの小・中学校では学年ごとに違う研修を行っています。しかし、**全校生徒30人弱のここテヘラン日本人学校では、小学生から中学生までが同じ場所に行き、親元を離れて学習を行っています。**今年度は、小3から中3まで男子10人、女子9人の19人でイラン北部に行ってきました。

### ◇トンネルを抜けると、そこは・・・

今回、宿泊学習で訪れたのは、**イラン北部の都市ラシュト(Rasht)**、そして、**テヘランから西へ約200キロの都市、ガズヴィーン(Qazvin)**です(地図参照)。私は、これまで何度か旅行でテヘラン以外の町に行きましたが、いずれも、テヘランから南の都市でした。テヘランから南は、砂漠が広がっていて、一年中雨がほとんど降らない乾燥した土地になっています。しかし、イラン北部は、テヘランの北に広がるアルボルズ山脈があるせいで、南部とは全く違った気候になっています。

みなさんが住んでいる中国地方でも、岡山県と鳥取県や島根県は、天気予報などを見ると季節によっては天気や気温が大きく違ってきますね。ただ、天気や気温が違っていても、街の風景や植物などはあまり変化がなく、田んぼが広がり、山には木が生い茂り、川が流れているような日本の風景が広がっていることでしょう。しかし、今回バスに乗り、テヘランからイラン北部の都市ラシュトに向かう間に、車窓の風景が、劇的に変化していきました。まずは、これまで私がイランで見たことのない景色、人々の生活の様子を少しですが紹介しましょう。

(地図中の丸数字は、写真番号に相当します。)



写真①は、テヘランから西に車で1時間半ほど走ったところで、テヘラン市内には高層ビルが林立して、農耕を行うことのできる土地はほとんど見あたりません。しかし、**テヘランの郊外に来ると、このように広々とした土地が広がり、農業を行っている様子が見られます。緑に見えるのは、トウモロコシ畑です。**この他にも、小麦を植えている畑もあります。

写真②は、写真①の地点から北に1時間半ほど走ったところです。ここは風がとても強く、その風を利用して風力発電が行われています(これについては、のちほど触れま

す。)ここでは山の斜面に注目してください。テヘランやガズヴィーン



の山は、木が全く生えていない岩山ですが、この辺りに来ると、**山にうっすらと植物が生えています。つまり、植物が育た**

**けの水(雨や露など)が手に入る**ということです。気候が変わりつつあることを予感させます。



写真③は、写真②の地点から30分ほど走り、トンネルを抜けたところです。ここで、**車窓の風景が劇的に変わりました。何と、山肌にびっしりと植物(樹木)が生えている**のです。

こんなに緑に覆われた山肌を見るのは、イランに来て初めてでした。そして、何と、ここでは、**米づくりが行われていた**のです。ちょうど、今は米の収穫の時期。日本のようにコンバイン(刈り取りの機械)などは見られず、**人間がカマを使って米を収穫していました。**収穫をしている人の脇には刈り取った米を運ぶのにか、牛が草をばんでいた。古き日本の原風景を見たようでした。



写真④は、写真③の地点からさらに1時間ほど北に行った



ところで、この辺りでは、**米ではなくお茶を植えている**ようでした。この辺りはイラン有数の茶の産地です。道路沿いの民家の庭には、鶏が飼われ、道端を牛が歩いていました。人間と動物との関係が密接な地域であることが感じられました。



そして写真⑥は、世界最大の湖、カスピ海です。**面積は37,4万km<sup>2</sup>。日本の面積とほぼ同じ広さ**をもちます。カスピ海といえば、キャビアで有名なチョウザメの生息地

写真⑤は、写真④からさらに北に1時間。もう、カスピ海です。対岸を見ることはできませんが、「あの向こうには口すぐ近くです。この辺りには**牧草地が広がり、乳牛がのんびりと草を食べて**いました。カスピ海沿岸には高い山はなく、なだらかな丘か、平坦な土地が続いていました。私が大学生の時に訪れた北海道の風景を連想させる光景でした。

です。対岸を見ることはできませんが、「あの向こうには口すぐ近くです。この辺りには**牧草地が広がり、乳牛がのんびりと草を食べて**いました。カスピ海沿岸には高い山はなく、なだらかな丘か、平坦な土地が続いていました。私が大学生の時に訪れた北海道の風景を連想させる光景でした。



写真では、気温や肌に感じる様子などは伝わりませんが、実際に移動してみると、**気温とともに湿度の変化にびっくりさせられます。**テヘランは湿度がとても低く、運動をして汗をかいても、木陰で休めばすぐに汗は乾きます。しかし、写真②の辺りから、風にしっとり感を感じるようになりました。なんだか、ムシムシします。そして、その不快感は写真⑥のカスピ海沿岸で頂点に達します。懐かしい、この蒸し暑さ。まさに、今、皆さんが暮らしている日本と同じ感覚でした。あとで、当地の湿度を調べてみると、湿度が75%もあったそうです…。

### ◇所変われば、品変わる…車窓から見たお店

バスに乗って旅をすると、その土地土地での微妙な変化を感じることができます。特にイランでは、その土地でとれた農産物などを、道行くドライバーに「これでもか!」というくらい宣伝します。あちらこちらに露店やリアカーが並び、**果物や野菜を荷台満載にしたトラックが、車をお店代わりにして商売を行っています。そんな中からいくつか紹介しま**



写真7。これは、ちょうど風景が大きく変わった写真③付近の道路沿いの店舗です。この付近はオリーブの栽培がさかんな地域です。オリーブと言えば、岡山県では瀬戸内市牛窓町のオリーブ園が有名ですね。この辺りは、瀬戸内海沿岸部と気候が似ている

のかも知れませんね。そこでとれたオリーブを加工して、オリーブオイルが作られていました。また、オリーブの実を漬けて、瓶に詰めたものも多数販売されています。



写真8は、農産物ではありませんが、数数のビーチ用品を売っているお店です。決して海岸沿いの海の家ではなく、カスピ海まで車で1時間以上かかるラシュト近郊なのですが…。でも、このようなお店を見ると、イラン人にとっては「海の近くに来たぞ」と思い、海が近くに感じられるようです。



写真9は、道路沿いではありませんが、この土地ならではの風景です。**ラシュトのバザールの様子**です。イランの町には、必ず、商業の中心地、バザールがあります。日本でも昔は、決まった日に決まった場所で市場が開かれていた(伊里中の近所で有名なものに、瀬戸内市長船町の備前国福岡市などがあります)。イランのバザールは常設です。そして、以前にも書きましたが、モスクとともに発展したという歴史があります。今年の7月に、イラン北西部のタブリーズという町のバザールがユネスコの世界遺産に登録されました。それほど、イランのバザールは歴史的、文化的価値が高いです。ここラシュトのバザールは、世界遺産ではありませんが、そこに暮らす人々の生活の臭いを感じられ、とても活気に満ちていました。



をかけると美味しい。]

ラシュトのバザールで目を引いたのは、**魚市場があること**です。**カスピ海が近く、そこで水揚げされる多くの魚が、ここラシュトのバザールで取引されます。**魚市場の付近に近づくと、魚の臭いが漂ってきます。水槽の中を泳ぐ魚、所構わず並べられた魚、くん製にされたり、魚卵を加工したり…。魚を食べて育った日本人にとって、とても懐かしい光景です。イラン人に「魚を食べるの?」と聞くと、「テヘランにはあまり魚を売っていないけど、カスピ海が近いここラシュトでは、朝から魚を食べるよ。」との答えが返ってきました。[写真左は、昼食の料理で出た魚(白身魚。外見はコイのよう?)の唐揚げのようなもの。レモン



### ◇原油大国イランでの新しい試み

私が暮らす中東には、サウジアラビアやアラブ首長国連邦など、日本が原油を多く輸入している国があります。そして、ここイランも、世界有数の産油国です。人々の生活を豊かにする電気。今年の東北関東震災によって日本の原子力発電所が被害を受け、深刻な電力不足となったこと、そして、日本国民みんなが節電を呼びかけ、夏の猛暑を乗り切ってきたことは、遠く離れたイランにも伝わってきました。そのように、私たちの生活にとって、欠かすことのできない電気を安全につくり、届けたい。そして、限りある資源を有効に使いたい。これは、日本人だけでなく、世界中の全ての人々がかもつ共通の課題です。

多くの国では今、**自然の力を利用したエネルギーづくり**が進められています。ここイランでも、限りある原油に頼りっきりになるのではなく、**自然の力を発電に有効に使うために、風力発電が行われています。**

私たちが見学したのは、マンジール(Manzil)という町にある風力発電所。左の地図の②の辺りです。ここには、大小109基の風車が設置されています。大きいもので、高さ約40m、羽の長さ19m。風速4m以上で発電を行うことができるそうです。見学当時、風速14mくらいの風が吹いていました。まっすぐ立っているのがやっとの強風です。ここは、山脈から吹き下ろす風が集まるためか年中強風が吹き、風力発電に適した土地といえます。

### ◇家の前の道は…

今年の宿泊学習で訪れる場所で、一番の観光地がラシュト郊外にある、マースレー(Masuleh)村です。ここは、山深い道をバスで登ってきた先にあります。この村が観光地である理由は、ずばり、村の建物がユニークだからです。

マースレー村は、とても急な斜面に、集落が張り付くように密集しています。ガイドさんの話では、1000年とも2000年ともいう、歴史ある村です。この村の特徴



は、急斜面に家を造ったために、道を造ることができず、家の屋根を道にしたということです。実際に村の中を歩いてみると、どこの家にも安全に行くことができます。しかし、歩いている場所が、道だと思いきや、下の家の屋根なのです。そして、細い路地が縦横無尽に走り、迷路のような道が続いています。ここマースレー村の有名なお土産は、カラフルなタペストリーのようなものや、かわいらしい小さな人形(写真右)です。いくつかの家では、老婆がじゅうたんの上に座り、せっせと人形作りをしていました。手作りなので、一つ一つに微妙な違いがあり、様々な表情をしていることが分かります。

次回配信は、10月5日頃の予定です。



# باد از تهران

～テヘランからの風～ 第10号 10月5日配信

伊里中学校の皆さん、こんにちは。10月を迎え、ぐっと秋らしくなってきたのではないのでしょうか。先日は、最低気温が10度近くまで下がり、秋を通り越して冬になったような気温だったと風の便りに聞きました。岡山県南部では、秋晴れの晴天が続いていることと思います。1、2年生の皆さん、総体はどうでしたか？初めての公式戦で、緊張した人もいるのではないのでしょうか…。

2年生の皆さんは、まもなく、チャレンジ・ワーク14がありますね。ぜひ、自分の将来につながる3日間にしてきてください。1年生も3年生も、総合的な学習の時間で、いろいろな取り組みが行われていることと思います。中学生期のみennaにとって、学校の先生から学ぶことも多いと思いますが、地域の人や仕事をもって働かれている人など、親や親戚、教師以外の大人との関わりや、その人たちから学ぶことはとても意味深いと思います。

私が日本を発って、海外(イラン)に住むようになってはや、半年が過ぎました。その中で、今まで日本で教師をしていると出会うことのないようなさまざまな人との出会いがありました。そしておそらく、これからも多くの出会いがあることでしょう。

日本には古くから「一期一会(いちごいちえ)」という言葉があります。みなさんが、総合の学習で何人かの人と出会うことでしょ。もしかしたら、その人との出会いは長い人生の中でたった1回かも知れません。でも、その人から学ぶことは、もしかしたら人生を大きく左右することになるかも知れないのです。「出会い」を大切に。そのような出会いが、それぞれの活動であることを願っています。

さて、今回の話題ですが、これまで私が「出会った」人たちから学んだことや、エピソードをいくつか集めてみました。

## ◇イランに住んでいる日本人

現在、海外で生活している日本人は全世界でおよそ110万人ほどいるそうです。その中には、ずっと海外で居住・生活している人(永住者:およそ35万人)や、私のように仕事をするために海外に住んでいる駐在員、勉強をするために海外に住んでいる留学生(3か月以上住んでいる人を合わせて長期滞在者といえます:およそ75万人)など、さまざまな事情があります。

**イランに住んでいる日本人って、何しているんだろう??イランにはどんな日本人が住んでいるんだろう??**これは、私がイランに赴任する前から思っていた疑問であり、興味深いことでした。

現在、日本とイランの貿易額(対日輸出額)はおよそ4.5億ドル(2010年度)と言われています。その多くは石油や、石油関連製品となっています。一方で、日本からイランに輸出されるものとしては、自動車などの輸送機械や電気機械など、日本が得意とする工業製品が多くなっています。実際に町を歩いていると日本製の自動車はよく走っていますし、以前述べたように日本製の電化製品(テレビやパソコン、携帯電話など)は町にあふれかえっています。このように、日本にイランのものが輸入されたり、イランに日本のものが輸出されたりなど、お互いの国同士が貿易をするためには、**商社**といって、**現地で品物を買付けたり、現地の人に日本の製品を売ったりするための代理店のような仕事をする人**が必要です。イランに住んでいる駐在員の多くは、こういった商社に勤める方々です。

また、イランを訪れる**日本人観光客にビザ(査証)を発行したり、イランに住む日本人の相談に応じたりする役割をもつ日本大使館**があります。正式名称は、「在イラン日本国大使館」といいます。日本人学校は、この附属施設となっています(建物別ですが…)日本大使館は、日本とイランとの経済協力や文化交流などの役割も担っています。

他には、**イランに住む農家の人や農業技術者たちに、日本で成功した農業の方法を伝えたり、その土地の気候にあった農作物の効果的な栽培方法などの支援・指導をするJICA(ジャイカ:国際協力機構)、イランや近隣の国々の情報を日本に伝える新聞社や通信社、放送局の支局に勤務する人**などもあります。

そして、**イラン人と結婚した日本人(女性が圧倒的に多い)**もたくさんいます。

このように、イランに住んでいる日本人と一口に言っても、いろいろな人がいることが半年間で分かってきました。そして、ここに書いた人たちは、お互いに”日本人”という連帯意識をもち、さまざまな場面で協力し合って生活しています。

## ◇イランの中の日本 ～テヘラン日本人会～

海外では、言葉や習慣が違うため、また、治安面での不安があるため、日本に比べて外出したり、近所づきあいをしたりする機会が極端に少なくなり、そのために世間と孤立した生活になりやすいと言われます。そのような不安を減らし、ともに協力して豊かな暮らしをするために、ほとんどの国や都市には、そこに住む日本人のための自治的な組織である「日本人会」というものがあります。

ここイランにも、**テヘラン日本人会**があり、上に述べた方々**140世帯およそ350人の日本人が加入**しています。日本人会では、毎年、その加入者たちの親睦と交流を図るために、さまざまな行事が行われています。以前、お伝えしましたが、毎年6月、日本人学校校庭で行われる「**チェナール祭り**」は、日本人学校PTAが主催する夏祭り、日本人会会員であれば誰でも来場し



( 左から、チェナール祭りで恒例のテヘラン音頭/春季テニス大会。夫婦でペア(奥側)を組み、初参加/ソフトボール大会。優勝目指して一投一打！)

いろいろなアトラクションなどに参加し、交流を深めることができます。子どもがいてもいなくても、みんな和気あいあいとしていて、イランにもこんなに日本人がいたんだ、と驚かされたのをよく覚えています。

そして、もう一つの大きな柱が各種スポーツ大会です。春と秋のテニス大会、9～10月のソフトボール大会などが大きなスポーツイベントとなっています。

ちょうど、今試合の真っ只中なのがソフトボール大会です。秋の恒例イベントとして、日本人会の男性たちがとても盛り上がるので有名です。人数が多い企業や団体は単独で出場しますが、駐在員の少ない企業などはいくつかの会社がまとまってチームを作ります。日本人学校は、今年、商社などと合同チームを結成し、大会にエントリーしました。どのチームも優勝を目指し、毎週末、練習や練習試合を行い、本番に備えます。学校・商社の合同チームは、8月末から練習を始め、その練習などで、いろいろな職業の人たちと会い、ともに練習をする中で、いろいろな話をする機会に恵まれました。

## ◇印象的な出会い ～高い目的意識～

東京に本社があり、日本を代表する大企業に勤めている人たちと話をしている、ふと気がついたことがありました。それは、**皆が高い目的意識をもっている**ということです。

私が出会うことができる人たちは、当然、私と同じように海外生活を送っています。聞けば、中学、高校時代から海外での生活や語学に興味があり、そのような進路を歩んでいる人が多いです。

例えば、私とほぼ同世代の20代後半の人は、プロサッカー選手を目指し、大学までサッカー一筋でやって来たそうです。Jリーガーになるまであと1歩のところまでいっていたそうです。しかし、サッカーだけでは将来引退後に生活できなくなるかも知れない、という不安が頭をよぎり、大学を1年間休学し、アメリカに語学留学し、戻ってきてから再び大学に通い、入社試験を受けて商社に入社したそうです。**現在は、商社で自動車部門の責任者として活躍**しています。

イランで働いている人の多くは男性ですが、同世代の女性も活躍しています。先ほど述べたJICAに勤務する方は、高校教師や大学講師の経歴をもち、**現在は農業技術を伝える技術者としてイラン各地で農業指導を行っている**そうです。彼女は、中学時代のロンドンへの単身留学の経験から、海外で働くことを夢見て、現在夢を実現させています。その人のモットーは、「いかに自分に誇りをもてる生き方ができるか」だそうです。

また、同じ日本人学校の先生の中には、旅行会社を辞めて先生になった人がいます。その先生は、幼少期からの「教師になりたい」という夢をもち続け、**違う職業で働きながら社会人としての経験を積み、晴れて教師となった**そうです。そして、旅行会社勤務で感じた外国へのあこがれから、海外で働くという日本人学校教師の夢も実現させてしまったのです。

紙面の都合上、載せることはできませんが、他にもまだまだ素敵な日本人がいっぱいいます。このような方々と話をすることができる幸せを感じつつ、自分も「初心」を忘れず高い目的意識をもって働かなければならないと決意を新たにしました。

## ◇日本代表との出会い ～日本人であることを感じた瞬間～

今回のテーマを選んだ最大の理由が、先日行われた第16回アジア男子バレーボール選手権大会でのバレーボール男子日本代表との出会いです。**植田辰哉監督以下12名の「龍神・NIPPON」が、先月21日から30日までテヘランで試合を行いました。**

結果から言うと、残念ながら日本の連覇達成はならず、5位に終わってしまいました。エース清水選手の負傷によるところが大きいと言われています。しかし、日本代表チームは、慣れない異国の地・イランで、一生懸命戦っていました。私は、日本人学校の子どもたちや先生たちとともに、2試合応援に駆けつけました。

中でも、最も興奮した。当日は、学校が**終はイラン人応援団、観横断幕を貼ったりして開始の時間となりまし狂的な声援が支配し、のチーム同士の試合は「一」の状態での試合観戦**は初めてでした。

そして試合が始まりました。**イランチームの得本選手のサーブの時には、ブーイングの嵐**。日しよう。試合は、地力で勝るイランが終始試合をりす。しかし、好プレーの度に声を枯らして応援を-CHA-CHA」を連呼します。こうして、スタンドに詰めかけた日本人がイ応援団に負けまいと、一体となって応援をしていると、**日本人であることを改**ことができました。

試合は、残念ながらイランに0-3のストレートで敗れてしまいました。その後、イランは世界ランキングがアジアNo. 1の中国を破り、大会初優勝を飾りました。日本はイランとの試合に敗れましたが、その後、インドに勝ち、5位を死守しました。

イラン戦ではありませんが、試合後に監督や選手たちと会って、話をする機会がありまし



観戦したことがありますが、**完全な「アウェ**

**点の度に、地鳴りのような声援が響き、日本代表選手は、さぞ、やりづらかったことでードし、日本は追いかける展開が続きました、タイムアウトの時には「NIPPON CHA**



**ラン人の大応援**

た。その中で、「異国で試合をしていると、日本人の応援がすごく力になる」ことや、「そういう人たちのためにも、ベストを尽くして勝ちたいといつも以上に思う」などの話を聞きました。私たちが、イランで生活をしていて、あまり「日本」だとか、「日の丸」を意識したことはありませんでした。しかし、今回、日本代表との出会いを通じて、同じ日本人であることの連帯感や、日本チームを愛し、日本を応援するといった日本人としての「誇り」を感じることができたように思います。次回配信は10月20日頃。世界遺産「ペルセポリス」の特集を予定しています。





～テヘランからの風～ 第11号 10月20日配信

伊里中学校の皆さん、こんにちは。2学期の中間テストが終わり、新しく後期の生徒会役員、学級役員も決まったのでしょね。新執行部のみなさん、先輩たちの築いた伊里中学校のよき伝統をさらに発展させるべく、活躍してください。1年生のみなさんは、中学校生活も半年を過ぎ、部活動や生徒会活動などで先輩を支え、頑張ってください。そして、3年生。いよいよ受験が間近に迫ってきましたね。そろそろ志望校も固まりつつあるのではないのでしょうか？悔いのない残り半年間となるよう、一日一日を大事にしてください。

さて、テヘラン日本人学校も前期の授業を終え、16日から後期が始まりました。こちらの学校は、伊里中学校のように1学期～3学期という分け方ではなく、生徒会役員の任期のように前・後期に分かれています。そして、短い期間ですが、前期・後期の間に休みがあります。

今回は、その休みで私が訪れた、イランを代表する観光地の一つ、古代ペルシアの遺跡・ペルセポリスを紹介したいと思います。社会の歴史の学習で、以前は中学生も学んでいましたが、今は、あまり深く学習しないため、知らない人も多いと思います。しかし、普通科の高等学校に進学すると、「世界史」という授業で必ず登場します。それくらい、古代の世界史の中で有名な遺跡がイラン南部にあるのです。



ペルセポリス全景→

### ◇ペルセポリスとは？

イラン南部の土地は、古くは「ペルシア」と呼ばれていました。今でも、「ペルシア語」「ペルシアじゅうたん」「ペルシア湾」など、イランの言葉や工芸品、地名にその名が残るように、「ペルシア」という言葉は何千年間も人々の間で使われてきました。ペルセポリスとは、そんな「ペルシア人」がつくった「都市」という意味があります。しかし、この言葉はギリシア語で、イラン人は普通、「ペルセポリス」とは呼びません。イラン人が敬意を込めて呼ぶその遺跡の名は、「タフテ・ジャムシード」。意味は、伝説の王「ジャムシード王」の「タフト＝玉座(ぎよくぎ＝イス)」、つまり、王様のおひざもとという意味です。

今からさかのぼることおよそ2500年前、イランの土地を支配していたのはペルシア人でした。日本はその頃、どんな時代だったでしょうか？まだ、卑弥呼も登場していない、弥生時代です。当時、ペルシアを支配していた王はキュロス2世。この王は、アケメネス朝ペルシアを創建します。キュロス2世とその息子、カンビュセス2世の2代で、アケメネス朝ペルシアは、西はエジプトから東はバキスタンまでの広大な土地を支配する大国に成長します。そして、アケメネス朝ペルシア最盛期の王様はダレイオス1世。彼は、紀元前522年～486年までの約40年間、王の座についていました。そして、その時代にこのペルセポリスはつくられたのです。ペルセポリスは、彼が治めていた国の大きさ、富の象徴、力を示すためにとても大きく、そして、美しく建てられたのです。

そんなペルセポリスですが、造営から約200年後の紀元前331年、マケドニアの王であったアレクサンダー大王によって攻め落とされます。この攻撃により出火、都は廃墟となってしまう、やがてアケメネス朝ペルシアも滅ぼされてしまいます。その後、歴史の表舞台から忘れ去られたペルセポリスは、だれも見向きもしない過去の遺物となり、それが幸いして、現在までその姿を残すこととなったのです。

### ◇ペルセポリスの驚くべき建築技術

日本にも世界に誇るすばらしい建造物がたくさんありますね。伊里小学校の時に修学旅行で訪れたかと思いますが、世界最古の木造建築の奈良・法隆寺。さらに、世界最大の木造建築の奈良・東大寺大仏殿。これらは、いずれも世界遺産に登録され、日本が世界に誇るべき立派な財産です。釘を1本も使わないこと、左右の屋根の傾きを少し変えて、地震などの揺れに対応することなど、その建築技術にも目を見張るものがあります。

ここペルセポリスは、今でこそ見るも無惨な姿の部分もありますが、今から2500年前の当時、世界一の都として多くの人々を驚嘆させる建造物でした。その名残が、遺跡のあちこちで見ることができます。



#### (1) 大階段

ペルセポリスに着くと、まず最初に通る階段。これは、この都がちょっとした高台に築かれているため、下の段から上の段に登るために通る階段です。階段の数は、左右ともに111段ずつ。階段1段の高さは10センチ。当時、石を切り出してこのように正確に階段を作る技術がすでにあったことにまず驚かされます。高さ10センチに設計されている理由は、馬に乗ったままでも、登りやすい高さである必要があったためと言われています。ここを通過して、いろいろな国からの使者が王様に会いに来たと言われている。

#### (2) 万国の門



大階段を登ると、目の前に高さ10m以上もある、巨大な門がそびえ立ちます。ここは、アケメネス朝ペルシアが支配していた23の国からの使者が王に会うための控え室の役割を果たしていたそうです。門は、一枚の岩から作られているのではなく、いくつかの岩を組み合わせ、そして、高さ10mまで持ち上げて作られています。今は、クレーンなどの建設機械がありますが、当時の人々の力だけでこのような高さの門を作ることができた、当時の建築技術の高さ、素晴らしさに感銘を受けます。この門の近くには、当時、高い所まで石を持ち上げていた機械(?)の名残の石が放置されています。この石をいくつも組み合わせ、坂を造り、大勢の人が引っ張ってこのように高いところまで重い石を持ち上げることができたと言われています。大勢の労働者が動員して、このような都を作らせることができたダレイオス1世の権力の大きさにも驚かされました。



子どもの大きさと比べると、ほら、大きい！→

#### (3) 謁見(えっけん)の間(アパダーナ)



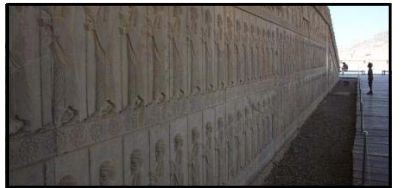
アケメネス朝ペルシアの時代には、王が居住する都は年間を通して一定ではなく、イランの気候にあわせて、季節によって王は住まいを変えていました。イランの気候については以前にも書きましたが、四季の変化のはっきりしている北部(カスピ海沿岸～テヘラン)、夏は涼しく、冬は寒い北西部、年間を通して暑い中部～南部など、さまざまな気候帯が同居しています。ここペルセポリスは、イラン中部～南部に相当し、夏は最高気温が40度以上になることもしばしばあります。一方、冬でも氷点下になったり雪が降ったりすることはなく、岡山の冬よりも暖かいと言われています。と言うことはもうお分かりですね。ペルセポリスは王様が寒い冬～春にかけてを過ごす都だったので。

ペルセポリスは、ペルシアにあった3つの都の中でも、特に、儀式をするために建てられたと言われています。そのため、王が儀式をするための間、各国からの使者が王に会うための間が必要でした。ペルセポリスの中心とも言える、謁見(えっけん)の間は高さ19mの支柱36本からなり、天井は、レバノン杉で屋根が作られていました。今でもそのうちの12本が当時の姿のまま残っています。天井を作る際に使った大量の木材は、イラン国内から調達しただけでなく、支配していたいろいろな国から取り寄せて作られていたそうです。イランの建築物は石やレンガが中心ですが、屋根に木材を使っているのは興味深いです。



### ◇精巧な彫刻に感じる古代人の息づかい

ペルセポリスをまわっていて随所に見られるのが、とても2500年前に作られたとは思えない、細かく、また創造的な彫刻です。先ほども書きましたが、ここペルセポリスは冬から春にかけて王が暮らした都。実は、イランにとって春は特別な季節なのです。



日本では、卒業と入学の春。出会いと別れの春ですね。イランでも春は出会いと別れの春です。しかし、それは人間どうしの出会いや別れではなく、過ぎゆく年への別れと来たるべき年への出会い。つまり年が変わる季節なのです。今でも、イランで使われている暦(イラン暦)では、3月21日が新年(ノールーズ＝New Day)です。

ここペルセポリスでは、毎年、新年を迎える日に、支配している23の国からの使者が一堂に集まり、王に貢ぎ物(各国からのおみやげ)をささげる儀式が行われていました。この様子が謁見の間に登る階段に描かれています(写真右上)。この彫刻は2カ所の階段にそれぞれ描かれています。保存状態がよいのは東側の階段の彫刻です。聞けば、長い間、土に埋もれていたため、風雨による風化をまぬがれたとのこと。まさに、奇跡です。この彫刻からは、ペルシア人が先導をし(写真左)、使者たちが各国からのおみやげを持って歩いている様子が手に取るように見て取ることができます。そこに描かれたおみやげの品は、実に多様で、ラクダあり、布地あり、壺などの陶器あり…。服装にも民族ごとの特徴が現れ、ブーツを履いている人もいれば、はだしの人もいます。

また、別の場所には、これら23の国の使者が王の座る玉座をかっこ上げる様子を描いた彫刻もあります。この「玉座かっこ上げ」の彫刻(写真右)は、まさに、「王は国の中心である」ことを国の内外に示す格好の材料であったことははずです。



### ◇ペルセポリスと宗教 ～その明と暗～

イランは今、イスラム教の国家です。しかし、ペルセポリスが栄えた頃には、イスラム教はまだ存在していませんでした。もちろん、キリスト教も。イランで古来より信仰されていたのは、ゾロアスター教(拝火教ともいいます)。「火・水・土」を神聖なものとするゾロアスター教は、アケメネス朝ペルシアでは、国の宗教=国教となり、国王の保護のもとにおかれました。

ゾロアスター教の教えでは、人々は「よい行い、よい考え、よい言葉」とともに「悪い行い、悪い考え、悪い言葉」も持っている。そうした善と悪が争い、最終的には善が勝つという考え方が根本にある。この考えを図に表したものが、ゾロアスター教のシンボルである最高神「アフラ・マズダ」(写真右)です。ペルセポリスでは、彫刻の中に、このシンボルであるアフラ・マズダがいくつも登場します。王の彫刻よりも上方に掘られていることが多く、王がこの宗教を信じ、神をあがめていたかが分かります。

しかし、時代は流れ、やがてイランにイスラム教がもたらされます。イスラム教の教えでは、キリスト教や仏教に見られるような、木・石・土・金属などで造った像を崇拜する習慣はありません。日本ではお寺には必ず「本尊」といって、最も大切にされている仏像があります。しかしイスラム教寺院＝モスクには、そのようなものは見あたりません。イランがイスラム教の国になってから、過去の遺跡にあるこれらの像を破壊する行為が行われました。残念なことに、ペルセポリスの数多くの彫刻は、顔面が傷つけられ、頭部が破壊されてしまっています(写真左)。もし、これらの像が破壊されずに残っていたなら、ペルセポリスの歴史的価値はさらに高いものとなっていたのではないかと思います。



と、胸が痛みます。

## ◇ペルセポリスから学んだこと

今回、テヘランから陸路約16時間をかけて、ペルセポリスの地を訪れました。その高台から遺跡を見渡すと、いろいろなことが頭をよぎりました。人間の築いた壮大な建造物に驚き、古代人の技術の高さに感動もしました。しかし、一番感じたことは、「人間の本性は変わらない」ということでした。

一緒に行



った生徒と→

私たち日本人は、島国に暮らし、歴史をふり返っても他の国が攻めてきたり、他の国に占領されたりしたことは、ほとんどありませんでした。だから、あまり実感することはないかも知れませんが、ここイラン・ペルシアはユーラシア大陸の真ん中。東西南北に果てしなく大陸が続き、古来より国の興亡が繰り返されてきたのです。目の前に広がる、かつての栄光の跡。そして、無惨に転がる巨石が物語る滅亡の記憶。繁栄と滅亡から2000年以上を経た今でも、人間は相変わらず同じことを繰り返しています。資源獲得のための戦争、同じ民族どうしによる醜い争い、独裁者による圧政と虐げられた国民…。ペルセポリスの遺跡を眺めていると、「いい加減、目を覚ませよ、人間よ。」という気持ちが沸いてきました。次回配信は11/4(予)

# باد از تهران

～ テヘランからの風 ～ 第12号 11月5日配信

伊里中学校の皆さん、こんにちは。そして、合唱コンクールお疲れさまでした。総合最優秀賞を獲得した、3年B組のみなさん、おめでとうございます。そして、惜しくも総合優秀賞となった3年A組のみなさん、悔しい気持ちはあるかと思いますが、精いっぱい頑張ったことと思います。1年生、2年生のみなさん、3年生の発表はどうでしたか？特に1年生のみなさん、この合唱が伊里中学校のよき伝統です。来年、再来年は、みなさんの番ですね。2年生のみなさんは、去年よりも優れた合唱となりましたか？



私は、テヘランにいてみなさんの発表を聴くことはできませんでしたが、同じ時間に、授業をしながら合唱コンクールの様子を想像していました。1年前、2年前などを思い出しながら…。ぜひ、この合唱で培ったクラスの団結を、これから残り5か月の学級での生活につなげ、さらにすばらしいクラスを作りあげていってください。

さて、ここテヘランでは、先週からおよそ1週間、雨が降り続きました。ここ数年では例がないほど長い期間の雨のようです。最高気温も10度台前半で、シトシトと降る冷たい雨でした。普段は小川のような道沿いの用水も、増水し、濁流と化しています(写真左)。その雨も、昨日やっと上がり、8日ぶりに太陽が顔を出しました。夏の間は、毎日ジリジリと肌を焦がす太陽の日差しでしたが、1週間以上も遠ざかっていると、恋しい感じがしました。そして家の窓から北の山を見ると、きれいに雪化粧をした山がそびえていました(下写真)。テヘランの冬はすぐそこまで来ているようです。

今回のテーマは、イランの文化、特に人間の一生に関わる文化です。日本には、『冠婚葬祭(かんこんそうさい)』という言葉があります。人は生まれてから、さまざまな節目の儀式をします。出産、入学、卒業、就職、結婚、還暦、そして、葬式…。それぞれの儀式には、日本人が古くから受け継いできた文化がありますね。ここイランでも、人々の一生には、いくつかの節目があり、日本と同じようにさまざまな儀式があります。しかし、それは日本人のそれとは大きく、または、少し異なっていて、なかなか興味深いものがあります。全てを直接体験したわけではありませんが、そのうちいくつかを紹介したいと思います。



## ◇イラン人は、パーティー大好き

イラン人は、人を家に招いて行うパーティーが大好きな国民だと思います。毎週末(金曜日が休日なので、木曜日)の夜には、人々は仲のよい人を自分の家に招き、パーティーを行います。イラン人のパーティーにはいくつかのルールがあります。

### (1) 夕方から深夜遅くまで、とにかく時間をかけて行う。

イランでは木曜日は、午前中のみ仕事があり、午後からは休みになる会社が多いです。仕事を終えたサラリーマンや、学校帰りの大学生たちは昼過ぎから夕方にかけて街に繰り出します。そこで食材を買ったり、パーティーに持っていくおみやげ(お菓子など)を買ったりすることが多いようです。そして、**だいたい夜7時から8時ごろからパーティーが始まります。そして、パーティーがはげ、人々が家路につくのは日付が変わってから…。遅いときには2時3時になることもあるようです。**どうしてそんなことが分かるかって…。実は、私の住む家の隣は、2週間に一度くらい、必ずパーティーをやっていて、音楽の音や人々が騒ぐ声などから、その様子が手に取るように分かるからです。**結構、夜遅くまでにぎやかですよ。**

### (2) 食べ物を出す順番がある。



イラン人からパーティに招待されたことがあります。一番最近おじやましたのは、大人の集まりではなく、息子が通う幼稚園の同級生の誕生日パーティー。その会はずがに夜遅くにはできないので、午後5時から始まりました。部屋に案内され、いすに座ると、**まず、飲み物**が出てきます。イランには、日本で言うところの紅茶のような『チャイ』という飲み物があります。机の上には、チャイと、角砂糖があり、まず、チャイを飲みながら自己紹介などをして歓談します。テーブルの上を見回してみると、他には、チョコレートやピスタチオ、スナック菓子と並んで、フルーツの盛り合わせがあります。リンゴ、バナナ、

ぶどう、オレンジ、…。おや、この緑のものは？？なんと、**キュウリが混ざっている**ではありませんか。そうです。キュウリはイランでは、野菜ではなく、果物なのです。このように、**果物やお菓子、チャイなどを食べながら会が進み、だいたい始まってから2時間くらい経ってから、お待ちかねの夕食となるのです。**大人のパーティーの場合、夕食のスタートは9時から10時ごろになるようです。夕食では、イラン国内外で採れるさまざまな食材を使った料理が机の上にならずらっと並びます。そして、出席者はバイキング形式で好きなものを好きなだけ食べることができるのです。

### (3) エンターテインメントが多彩

パーティには、誕生日会、お別れ会、歓迎会、行事の打ち上げ…。のように、主催者によってそれぞれ目的が異なります。しかし、パーティ好きのイラン人の手にかかれば、どんなパーティも、楽しく思い出に残るものになります。パーティの成否は、専門の司会者やエンターテインメント担当のスタッフの出来によるところがほとんどです。子どもの誕生日会の場合、フェイスペインティングや、輪になって遊ぶゲーム、ダンス、人形劇などを2人の司会者やコーディネーターで分担して行っていました。



## ◇ゴージャスなイランの結婚式

残念ながら、まだ、イラン人の結婚式に招待されたことはありません。しかし、イラン人に話を聞くと、イランの「結婚」という文化は、とても興味深いものがあることが分かりました。みなさんは、結婚式に出席したことはありますか？私も過去、結婚式をしましたが、日本の結婚式は男女が同じ会場に集い、夫婦になる2人を両親や親戚、友人など出席者みんな

で祝福します。イランの結婚式も、目的は日本と同じで、カップルの新しい門出を祝うのですが、ちょっと様子が違うようです。

以前、テヘラン市内を走るバスを書いたことがあります。覚えていますか？イランのバスは、男女一緒に座ることはできません。男性が前ならば、女性は後ろと言うように、分かれて乗らなければなりません。実は、結婚式もそうなのです。

指輪の交換や、誓い(日本の若いカップルの多くは、教会式なので、聖書を使い、神＝キリストに誓約をしますが、イスラム教徒はコーランを使い、神＝ムハンマドに誓約をします)の儀式などは、両親や兄弟姉妹、親戚など近親者のみ参加するので、男女同じ空間で式が進みます。しかし、**日本で言うところの披露宴(結婚したことをみんなに知らせる会)は男女別々となっている**のです。新郎さん側、新婦さん側にそれぞれ男性、女性に分かれ、そこで会が進んでいくそうです。そのため、2つ以上の大きな部屋をもつ会場が結婚式場となります。サロンのような部屋をもつ大きな会場です。式は、見応えがあるそうです。



一方、日本でもイランでも同じなのは花嫁さん。この日ばかりは新婦さんは、きれいなドレスで着飾ります。一説には、**ドレス1着が1,000,000トマン(日本円でおよそ65万円)**くらいするそうです(左写真はドレスショップ)。日本よりも物価が安い国、イランでのこの額は、**サラリーマンの年収に匹敵する**そうです。この辺りからも、ゴージャスぶりが分かります。

結婚式が無事終了すると、カップルは自動車に乗って自宅に戻ります。その自動車が、とてもゴージャスなのです。**ボンネットや後ろ、ドアの付近を生花やカラフルなりボンできれいにデコレーションしている自動車に乗り、新郎さんはタキシード、新婦さんはウェディングドレスのまま自宅に帰ってくる**のです。週末などに街を歩いていると、このようにきれいに花が飾られた自動車をよく見かけます。「あっ、結婚式の車だ。」遠くから見てもすぐに分かります。



ちなみに、イランにも日本で言うところの「大安」「仏滅」などがあります。イランの場合は、「この日」というのではなく、結婚式などのお祝いに適した月、逆に、お祝いをしてはいけない月があります。「祭り」の項目でも触れますが、ハッピーな祝日の日や、その付近では結婚式は歓迎されますが、逆に、悲しい祝日や、その前後は結婚式はタブーとされているようです。

## ◇イランのお葬式

人はやがて年老いて、死んでいくものです。死は、古今東西を問わずとても悲しく、つらいものです。特に残された家族にとっては、イランでも毎年、多くの人が亡くなります。平均寿命は日本よりも低く、およそ73歳くらいと言われています。(ちなみに、日本は83歳で世界一)。人は死ぬとどうなりますか？日本では、お葬式が行われ、遺体は火葬(かそう)されます。しかし、**イランでは遺体を焼くことはありません。遺体は、土に埋められます。**これを土葬(どそう)と言います。

イランでは、人が亡くなると3日間、お葬式の儀式が行われます。1日目は埋葬(まいそう)、つまり遺体を土に埋める儀式、2日目は親族だけで家で喪に服す儀式、そして3日目はモスク(写真左は、宿泊学習で行った町のモスク)で大勢の人が故人と最後の別れをする日です。



日本では、お葬式がいつでもどこであるかなどを放送で伝えたり、故人の家の近くに貼り紙をします。イランでも同じように、故人がなくなるとその人の式がいつでもどこであるかなどを紙に書いてモスクの掲示板に貼ります(写真右)。日本との大きな違いは、**生前の顔写真を紙に載せる**ことです。これは男性のみで、女性はたいてい名前や住所のみです。また、幼くしてなくなった子どもの葬式を告げる紙はとてもきらびやかで、とても亡くなったことを感じさせません。子どもの死を告知する紙は、40日間貼られ、短くしてこの世を去った子どものことをより多くの人の心に刻んでもらうのです。



私がイラン中部の街シーラーズ(ペルセポリスに近いイラン第3の都市)のモスク(写真左)を訪れたときのことで。そのモスクは、**エマームザーデ**と言って、**イスラム教の歴代の指導者が祀られているモスク、つまり聖廟(せいびょう)**です。入口を入ると、正面にモスクのドームが見えました。まっすぐモスクに進んで歩いていきます。ふと、足元に目を落とすと、大理石のタイルにいろいろな字が書かれています。それは、墓石でした(写真右)。つまり、その下には亡くなった人が埋葬されています。日本人の感覚では、**お墓の上を歩いたり、墓石を踏んだりすることはとても失礼なこと、罰当たりなこと**です。しかし、イラン人に話を聞くと、**お墓の上を歩いてもらうために平らにしている**。誰も踏まないよりも、みんなが踏む方がより良いそうなのです。墓石の下に眠る故人と、墓の上を歩く私たちが無言のうちに会話をする。そんなことを望んでいるようです。



また、イランはかつてイラクとの間で8年間にもわたり戦争をした経験があります。この戦争で亡くなった人たちは、「殉教者」としてあがめられ、集団墓地のような場所でもとても手厚く葬られています(写真右はガズヴィーン(断敷地)のモスク)。



また、イランはかつてイラクとの間で8年間にもわたり戦争をした経験があります。この戦争で亡くなった人たちは、「殉教者」としてあがめられ、集団墓地のような場所でもとても手厚く葬られています(写真右はガズヴィーン(断敷地)のモスク)。

## ◇イスラム教の教えに基づいたさまざまな祭り

イランに来ておよそ7か月が経ちました。その間、何度か、祝日で学校が休みになりました。日本にも祝日がありますね。こどもの日や敬老の日のような誰かのための日、体育の日や文化の日など、過去の記念日が祝日になったものがあります。イランでの祝日は、大きく分けて2つ。それは、**ハッピーな祝日とそうでない、悲しい日**と言い換えることができます。例えば、歴代のイスラム教の指導者の命日や殉教(じゅんきょう)日は、悲しい日です。一方、ラマザン(断食)が明けた日や、聖地メッカへの巡礼が終わり、帰ってくる日(ゴルバン祭)などは、ハッピーな祝日です。

お祭りといっても、われわれ外国人にとっては、あまり縁があるものではありません。しかし、**街中を歩いていると、だん**



だんとお祭りが近づいてくるな、という雰囲気を感じることはできます。悲しい祝日の前は、街の中の飾りつけが黒っぽいものになり、旗も黒色になります。一方、ハッピーな祝日の前は、飾りつけが赤や黄色、オレンジなど明るいものになり、旗も赤やうす紫などのカラフルなものになります(写真右)。来週7日(月)は、上を書いたゴルバン祭で祝日となり、学校や会社はお休みとなります。街の中で、人々がどのように祭りに向き合っているかを見てみたいと思います。そして、これから2か月の間に、ハッピーな祝日と悲しい祝日がやってきます。その様子も、機会があればお伝えします。次回配信は11/末頃(予)



# باد از تهران

～ テヘランからの風 ～ 第13号 11月29日

伊里中学校の皆さん、こんにちは。芸術の秋、食欲の秋も足早に過ぎていき、気がつけばもうすぐ師走(しわす)。今年も残すところ、あと1か月となりましたね。期末テストが終わったところでしょうか。3年生のみなさん、入試まであとわずかとなってきました。これまでの学習は順調でしたか？テストが終わって、ホッとしていると思いますが、これからが本当の正念場。今までの努力が報われるためにも、今一度、手綱(たづな)を引き締めて勉学に励んでください。遠くからですが、応援しています。



さて、ここテヘランの秋は日本以上に駆け足でした。前回の『テヘランからの風』では、雨模様様のテヘランとお伝えしましたが、その後、**11月8日～9日にかけて季節外れの雪が降りました。学校周辺も一面の銀世界**(写真左は家から見た通り周辺。歩道には雪が・・・)。校庭も20cm近い雪に見舞われたのです。乾燥した、雨の少ない国・イランですが、ここテヘランは標高1500mの高地。岡山県・鳥取県境に近い大山の山頂付近に相当するので、冬には雪も降るのです。しかし、それにしても今年の初雪は早かったです。それ以降も雨模様・雪模様の天候が続く、秋はどこへやら。あっという間に冬本番となってしまいました。そんな11月でしたが、

日本と同様、秋には芸術・文化の行事が多くありました。月半ばには、イランで日本語を勉強している人による「日本語弁論大会」という行事がありました。

今年は、3月に東日本大震災が発生し、その時の津波や原発の事故等で東北地方を中心に大変な被害がありました。日本人学校には、地震の被害によって祖国へ帰ってきたイラン人の子どもたちや、日本で地震を経験してからこちらに赴任した先生がいます。また、地震発生時にはイランにいて、直接地震を経験してなくても、家族や友達などが日本にいて、その人たちの安否を気づかった人もたくさんいました。多くの人の心に深い傷を残した大地震は、日本人だけでなくイラン人にとっても心の痛む出来事でした。多くのイラン人が日本(人)のために募金をし、日本に来て救助活動などをしたそうです。私自身も4月以降、何度となくイラン人からお悔やみの言葉をもらいました。遠く離れていても、そのような言葉をかけてくれるイラン人を尊敬したものです。**弁論大会では8人の日本語を勉強しているイラン人弁士が、東日本大震災から学んだこと、感じたこと、日本へのメッセージなどを、日本語で多くの人に伝えました。聞いていて、とてもしっかりした意見や話しぶりに感動しました。**

また、日本人学校の児童生徒は、その弁論大会で東北地方の民謡を披露しました(写真下)。大勢の聴衆の前で演奏することに緊張しながらも、精いっぱい演奏することができました。そして、イランの人や日本の人に向けて、何らかのメッセージを送ることができたのではないかと思います。

さて、今回のテーマは、日常生活で目にするもの、使うものについてです。日本でもイランでも、毎日家から外に出るといろいろなものを目にします。また、生活していくためにはいろいろなものを買い、それらを使っていかなければなりません。こと外国においては、言葉の問題があり、日本のようにはいかないことも多々あります。それらに戸惑いながらも、その戸惑いを楽しみに変えて生活していくことで、毎日が充実してくると思います。今回は、そんなお話・・・。



## ◇お店でものをかうためには・・・

ここは、テヘラン市内のとあるスーパーマーケット。今日は、今晚のごはんを作るために買い物にきています。お肉コーナーにやってきました。たくさんのお肉、ソーセージなどが並んでいますね(写真下)。みなさんは、お店で品物を買う時に、何を頼りに買いますか？必要とするものは何か、どれがおいしそうか、安いかなどの情報を頼りにしませんか？それは、『絵や写真』による情報の場合もあれば、『文字(数字)』による情報、『言葉』による情報の場合もあるでしょう。イランには豚肉は売っていませんので、主に売られているのは牛肉と鶏肉です。



牛肉と鶏肉の区別はつきませんが、イランではよく、羊の肉が売られています。牛肉と羊肉は見た目がよく似ていて、素人では区別が付きません。日本では、「牛こまぎれ」「豚ロース」などと表示がされてあって、「100g当たり198円」などといていねいにパッケージにシールが貼ってあります。しかし、イランでは、それらの文字は、全てペルシア語。ソーセージは中が見えないため、何の肉か分かりません。

また、野菜や果物の場合はどうでしょうか。見た目では区別をつけることができますが、問題は値段。多くのお店では、1キログラム当たりの値段を表示しています。写真右の果物は、手前の黄色い果物がマンゴー、奥の赤い果物がサクランボです。そこに、1kg当たりの値段がペルシア数字「۳」と「۰۰۰」で書かれてあるのが分かりますか？日本では、1パックいくら、1ついくらがほとんどですが、イランでは、普通、野菜や果物は自分で欲しいだけ袋に入れてそれを秤(はかり)の上ののせて、お店の人が値段を言うのです。その値段の表示もペルシア語。そして、お店の人が言う値段も、ペルシア語。さあ、どうしましょう・・・。ここで、**買い物をするためには、最低限のペルシア語の知識(言葉と数字)が必要なお店**が分かりますか？一言もしゃべらずとも買い物をすることはできません。実際、私はテヘランに来て1か月くらいは、店で一言もしゃべらずに(正しくは、しゃべれずに)買い物をしていました。しかし、陽気なイラン人はいろいろと話しかけてきます。「何を言っているのか分からない。」「話したくても、話せない。」「この何とも言えないもどかしい気持ちが、やがて、「イランの言葉を話したい」「話せるようになるために勉強したい」という気持ち呼び起こすことにつながりました。



### (1) 数字を覚えよう。

はじめに覚えたのは、数字です。日本は欧米と同じく、アラビア数字(算用数字)を使っています。町の至る所に見られる数字は、ほぼまちがいない0～9までの10個の数字の組み合わせです(198円、705-0032、0869-67-0334、18:45・・・)。イランでもアラビア数字を使っているところはありますが、あまり多くありません。先ほど例を挙げた、ものの値段や、住所の番地、電話番号、デジタル時計の表示は、ほとんどペルシア語の数字で表記されています。また、自動車のナンバープレート(写真右上)もすべてペルシア語数字です。日常生活を送る上で、この数字に慣れないと生

活できないな、と思いました。0～9までの10個の数字を覚えることで、買い物がぐっと楽になりました。下はペルシア数字です。

アラビア(算用)数字	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9
ペルシア数字	۰	۱	۲	۳	۴	۵	۶	۷	۸	۹

上のナンバープレートの番号は、左から「6・7・(1個空けて)・8・1・3/4・4」になります。読めましたか？ちなみに、左の果物の数字は3です。



### (2) お金に慣れよう。

数字を覚えて、どの品物がいくらかがだいたい分かってくると、買い物をして全部でどのくらいかの予想がつくようになります。それまでは、何をかうにも大金を持ち歩き、大きなお金を出してお釣りをもらっていました。しかも、そのお釣りも、いくら払ったから、いくらお釣りなのか全く分からず、お店の人の言いなり。しかし、金額の予想がつくと、その金額に近いお金を出すことを覚えます。

**イランのお金の単位は、RIAL(リアル)**と言います。リアルが使われている国は、イランだけです。私たち外国人は、それぞれの国のお金を両替所に持っていき、リアルに両替をしてから買い物をすることになります。両替をすると、リアル紙幣がもらえます。現在、日本円とリアルの交換比率は、日本円100円に対しておよそ16,000リアルとなっています(町で売られている品物に10,000リアルという表示があれば、日本円に換算すると、およそ60円くらいになります)。10,000円札を両替すると、1,600,000リアル分の紙幣がもらえます。160万と聞くと、何だか、お金持ちになったような気がします。

**イランの紙幣は、日本と違って、たくさんの種類があります**(写真左上)。左上から反時計回りに順に、500リアル、1,000リアル、2,000リアル、5,000リアル、10,000リアル、20,000リアル、50,000リアル、500,000リアル、1,000,000リアル。この他に、今年3月に登場したばかりの100,000リアルがあります。全部で9種類。そして、5種類のコイン(硬貨)があります。



イランの紙幣には、どれも同じ人の肖像画が描かれています。これは、イランイスラム革命を起こした最高指導者エマーム・ホメイニ師です。ホメイニ師は、今から20年以上前に死去しましたが、今でもイラン宗教界の神様のような存在で、町のあちこちに肖像画や写真が貼られ、こうして紙幣にも顔が載っています。また、紙幣の裏には、イラン国内のさまざまな建物や風景のイラストが描かれています。例えば、10,000リアル(写真左)は、イラン最高峰(5,671m)のダイヤモンド山(我が家からもうっすら見えます)、20,000リアル(写真右)はイランの古都エスファハーンのエマーム・モスク(テヘランからの風5号で紹介)が描かれています。



これらの紙幣、硬貨を使って買い物をしますが、1つ困ったことがあります。何と、**イランの通貨単位はもう一つある**のです。これは正式な通貨単位ではありませんが、日常生活ではイラン人がリアル以上によく使うので、こちらの方が正式な通貨単位のように感じられます。それは、**トマーン**と言って、リアルの1/10です。つまり、10リアルが1トマーンとなります。買い物に行くと、値札が貼られていますが、単位がリアルなのか、トマーンなのか、よく確かめなければなりません。

先日、パン屋さんに行き、友達の家を持って行くおみやげ用のお惣菜パンを買いました。お店の人は「12370」と書かれた値札を私に渡しました。私は、20,000リアル紙幣1枚を出して買おうとしたのですが、お店の人は、受け取りません。もう一度出すと、「ちがう！12,370トマーンだ！」と言うのです(もちろん、ペルシア語です)。つまり12,370リアルだと思っていたので、びっくり。800円近いパンに驚きました。このように、あらかじめ、どちらの単位で表示されているのかを確かめることがとても大切なのです。(左の果物はいずれも3,000トマーンです。)

### (3) 慣れたら会話を楽しもう。

テヘラン生活も半年を過ぎ、買い物にも慣れてきました。最近では、お店の人との簡単な会話ができるようになりました。例えば、「この前買った〇〇は、おいしかったよ。」「〇〇は、今日、入ってる(入荷している)?」「どっちの〇〇が、甘い?おいしい?」などです。イラン人は、話し好き。男性も女性も、仕事の手を止めて話に夢中になる時があります。よく行くスーパーでは、私の顔を覚えてくれ、おまけをしてくれたり、棚の奥から、状態のいい野菜や果物を出してくれたりと、とても親切です。このような人に感謝の気持ちを伝えたり、私の情報(日本人で、イランには仕事できて、妻と子どもがいて、どこどこに住んでいてなど・・・)を言って日本のことやイランのことについて話したりすることができるようになってきました。まだまだ不慣れなので、とても難しいことは聞けないし、早口でしゃべられると聞き取れないことが多いですが、野菜や果物の名前や、お願いする時の文章などはスラスラと言え、お店の人と話をすることができます。テヘランは、イランの首都とはいえ、お店の人で英語がしゃべれる人はあまりいません。困ったら、つい英語や日本語が口をつきそうになりますが、そこはぐっとこらえて、覚えているありっただけの単語をふりしぼってペルシア語で会話をすると、意外なことに相手に通じるのです。自分の発した拙い言葉が相手に通じた時の喜びは、とても嬉しいものですよ。英語も同じだと思います。「伝えたい」「伝えよう」という気持ちが相手に届けば、相手も分かってくれるものです。

## ◇ミズがミズでなくなった日・・・ペルシア文字のい・ろ・は



テヘランの町を歩いていると、さまざまな看板(写真左)を目にします。そのほとんどは、先ほどから出ている、ペルシア文字。このペルシア文字は、「ミズが地面をはったようなもの」にしか見えませんでした。それもそのはず、全くの知識がないまま、イランに入国したからです。このような状態は、およそ半年間続きました。しかし、ある日、同僚の先生に教えられてから周りの文字や壁の注意書きが、少しずつ文字になっていることに気がつきました。ミズがミズでなくなっていくのは、とても新鮮でした。いま、私は文字を覚え中です。しっかりと覚え、いろいろなものが読めるようになっていきたいです。(次回配信は12月10日頃。イラン最大の祭をレポート。)



# باد از تهران

～テヘランからの風～ 第14号 12月12日配信



伊里中学校の皆さん、こんにちは。12月も半ばが近づき、日々、慌ただしさが増している頃ではないでしょうか。期末テストが終わり、あとは楽しいクリスマス、冬休み、そしてお正月・・・。日本は、寒さが厳しくなる頃、とてもうきうきした季節を迎えますね。

ここイランでも、冬の寒さは厳しく、前回お伝えしたとおり、雪も降ります。今シーズンは、すでに3度の積雪がありました。例年、こんなに雪が積もることはないそうです。あるデータによると、今年の降雨量は平年の2倍以上だとか。これも、地球温暖化の影響なのでしょう。



さて、今回お届けするのは、先日行われた、イラン最大の宗教行事についてです。ご存じの通り、イランはイスラム教の国です。イスラム教を開いた人は、ムハンマドという人です。今から1400年近く前のことです。そのムハンマドの死後、後継者＝指導者を誰にするかで考え方が分かれました。公平に話し合いをして後継者を決めようとするものがある一方、ムハンマドから指名された者が後継者になるという考え方もありました。前者の考え方で選ばれた人物を中心にまとまっていたのがスンニ派、後者の考え方で選ばれた人物を中心にまとまっていたのがシーア派と呼ばれるイスラム教の一派です。

ここイランは、イスラム教シーア派を信仰する人が国民の大多数を占めています。しかし、世界中のイスラム教徒のほとんどは、スンニ派を信仰しています。派が違っても、イスラム教の教えそのものに大きな違いはないのですが、指導者(エマーム)が違えば、当然、その指導者たちの考え方も少しずつ変わってきます。このように、一見複雑な成り立ちのイスラム教ですが、特徴的なのは、歴代の指導者をとても敬うということです。その中でも、今回お伝えする、「アーシュラー」は、その中でもとても意味深く、イラン人の多くが関わる行事として有名です。

## ◇何をしてお祭りなの??

イスラム教シーア派最大の宗教行事「アーシュラー」は、何をしてお祭りなのでしょう。日本にも多くのお祭りがありますが、祭りには、それぞれ意味があります。例えば、日本の秋祭り。これは、1年間の豊作を神様に感謝することから来ているそうです。では、アーシュラーとは何をしてお祭りなのでしょう?これを説明するには、少し細かいお話、イスラム教の指導者のお話をしなければなりません。

上にも書きましたが、シーア派は、イスラム教を開いたムハンマドが指名した後継者のもとに集まってできあがっています。この最初の後継者の名前をエマーム＝アリーと言います。その後、10人のエマームが登場します。いずれも今から1000年以上前のお話です。その10人の一人に、エマーム・ホセインという人がいました。

エマーム・ホセインは、アリーから数えて3代目の指導者でした。ホセインは、当時、イランに対して圧政(わがままな政治)をしていたウマイヤ王朝に対して戦いを挑みます。戦いの地は、カルバラー(現イラク南部)。ここで、ホセイン一行は72人、それに対してウマイヤ王朝は2000人以上と、圧倒的な数の差での戦いを強いられます。やがて、ホセインは傷を負い、それがもとで亡くなってしまいます。一見、普通の歴史的なできごとのように思えますが、シーア派の人々にとって、指導者が悪(圧政をしていたウマイヤ王朝)に破れたことが屈辱であり、圧政から人々を救うために敢えて不条理な戦いに挑んだエマーム・ホセインを英雄視するようになりました。そして、ホセインが受けた傷の痛みを分かち合い、忘れることのないようにしようという風潮が広まってきたのです。

今から1300年以上前の史実ですが、これを後世(現代)にまで語り継いできたのはイラン人のネットワークのたまものです。人から人へ口伝で伝わっていき、現在では国民の誰もが知っている大きな祭りとなったのです。では、街の様子や祭りの一部分を写真でふり返ってみましょう。

アーシュラーのお祭り

### (1)祭りまで・・・

お祭りが行われたのは12月5日、6日。そのおおよそ2～3週間くらい前から、街の至る所に黒い幕がかけられたり、お茶やお菓子を振る舞

ってくれたり、お祭りの準備が始まります。また、市場を探せば、お祭りに使う道具や旗などが売られています。太鼓の練習も始まります。



### (2)祭り1日目

12月5日は、お祭りの1日目。この日は、イスラム暦61年(西暦680年)にホセインがウマイヤ王朝との戦いで、体に傷を負った日となっています。この日は、子どもと外出していましたが、ホセインに扮した老人がマイクを片手に哀しい歌を歌う中、ホセインの仲間達に扮した騎馬隊(おそらく72人)が街をパレードするイベントに、偶然そうぐうしました。

また、この日を中心に、料理の振るまいが各地で行われます。振る舞われるものは、お茶やケーキ、また、軽く2食分くらいはある食事・・・。ちなみに、アーシュラーで一番よく提供される食事は、「ゲイメ」です。ゲイメとは、豆と肉の煮込み料理。日本で言うところのほんのりカレー風味のシチューといったところでしょうか。味はとてもおいしく、寒い体を温めてくれます。

祭り1日目のハイライトは夜。町内会ごとに集まって、ドラムをたたきながら行進します。ドラムをもっていない人の両手には、鎖が握られています。この鎖をドラムと哀歌のリズムに合わせて自分の背中に打ち付けます。ホセインが戦いの際に傷ついた、その痛みを追体験し、分かち合っています。このお祭り1日目のことを「タースアー」と呼びます。



### (3)祭り2日目

1日目のハイライトが夜なのに対して、2日目はお昼ごろに祭りのハイライトを迎えます。昨日にも増して大勢の見物人が見守る中、町内会ごとの「ダステ」と呼ばれる一団が行進します。一団の先頭には、旗を持つ子ども、その後ろにはホセインの子どもたちに扮した子ども、そして、重いもので100キロ以上はあるという、鉄製のみこしのようなものを交替で担ぐ大人たちが続きます。このみこしを一人がかつぎ、ぐるっと1周しては、次の人に交替していました。これらは、子供用のものもあり、子どもたちも交替で担いでいました。その後ろには手に鎖を持った大人が続きます。そして、哀歌にあわせて鎖を自分の背中に打ち付けたり、自分の胸を手で打ったりしながら歩いていきます。

やがて、正午近くになると、モスクからアザーン(礼拝の呼びかけ)が流れ、礼拝の時間がやってきます。通りを歩いているダステの集団は、その場に座り込み、持っていた布をひろげ、メッカの方角を向いて神に祈りを捧げます。

やがて、再びダステは動き始め、大勢の見物人の前を進んでいきます。私が見た場所の近くには、「エマーム・ホセインモスク」があり、近くの広場はエマーム・ホセイン広場と名付けられています。ここには、近くのダステが一堂に集まり、ものすごい賑わいを見せていました。ダステの行列に混じり、ホセインとその敵(ウマイヤ王朝のヤズィード)に扮した人(写

真右下にある赤い衣装の人)もあり、さながら歴史絵巻のようでした。2日目のホセインの殉教の祭りを「アーシュラー」と呼びます。



#### (4) 祭りの後

アーシュラーのお祭りは2日間で終わりではありません。ダステの行列は見られませんが、相変わらず、街中にはふるまいをするための小屋が設けられています。このアーシュラーがある月を、イスラム暦で「モハッラム月」といいます。このモハッラム月の間は、人々は喪に服しています。結婚式などのお祝い行事はできません。街中にも黒い旗がなびき、国を挙げて追悼の意を表しています。次回は1/初旬



# باد از تهران

～ テヘランからの風 ～ 第15号 1月10日配信

伊里中学校の皆さん、新年明けましておめでとうございます。昨年はテヘランからの風を読んでいただき、ありがとうございました。今年も、イランの「いま」が分かる内容、イランの「本当の姿」が少しでも伝わるよう、定期的に通信をお届けできればと思っています。

2012年が始まって、はや10日経ちましたが、改めてふり返ってみると、2011年は、本当にいろんなことがあった1年間でした。私は、3か月間しか日本にいませんでしたが、その間に、東日本大震災が発生し、その後も多くの悲しい事件・事故、衝撃的なニュースがここ

イランにも伝わってきました。しかし、一方で明るい話題もたくさん伝わってきました。2012年が、伊里中学校と先生方・生徒のみなさんにとって、すばらしい1年になりますことを、遠くイランより祈っています。3年生のみなさんは、いよいよ入試の月を迎えましたね。冬休みは充実していましたか？あと約3週間後には、私立の入試が控えていることと思いますが、いままで取り組んできたことを信じ、また、担任の先生をはじめ、応援して下さる全ての先生を信じ、自分の夢に向かってラストスパートをしてください。また、1・2年生のみなさん、1年後、2年後はあつという間にやってきます。今から備えをしておけば、ずいぶん楽な1年、2年後を迎えられることでしょう。さて、2012年、最初の通信のテーマは、「イランの冬」についてです。今までの通信を読んでくださった方はお分かりのように、イランはとて大きな国(日本のおよそ4.5倍)で、気候もさまざまです。しかし、日本と同じ北半球に属しているため、日本と同じように11月頃から2月頃にかけて「冬」がやって来ます。しかし、私にとってイランで初めて経験する「冬」は、日本の「冬」と似ているようで、ちょっと違うところもあります。今回は、そんなお話・・・。

## ◇日本ではかぼちゃを食べるけど・・・

1年間で太陽の出ている時間が最も短い日を何とていうか、知っていますか？答えは、冬至(とうじ)です。去年は、12月21日(水)でした。日本では、古来より冬至にはかぼちゃを食べ、ゆず風呂に入る習慣がありました。これは、調べると、「古来より人々は冬という季節に生活の不安を感じており、無病息災を祈るために、野菜の少ない季節に栄養を補給するためのかぼちゃを食べたり、その香りに邪を祓う霊力があると信じられているゆずのお風呂に入るなどを夜をこしていた」ようです(「日本文化いろは事典」参照)。ここイランでは、というと・・・ありました。同じく冬至の日、一年で最も夜が長い日を特別な日とする習慣がイランにもあったのです。イランでは、冬至のことをシャッベ・ヤールダ(shabbe YALD A)といいます。シャッベとは「夜」、ヤールダは「誕生」を意味します。あとで出てきますが、クリスマスとも関わりがあるようです。

シャッベ・ヤールダの夜、イランでは、3つのものを食べます。1つめはザクロ(写真右下)、2つめはスイカ、そして3つめはナッツです。この組み合わせは詳しくは知りませんが、日本と同じく健康を祈るための食物だそうです。12月になると、店頭でスイカがお目見えします(写真左下)。真冬にスイカ？と思うかも知れませんが、そこは国土の広いイランのこと。この時期でもスイカが採れる地域があるのでしょう。日本ではまず冬に食べることのできないスイカが売られていて、おや？？と思っていたところ、お店の人に「シャッベ・ヤールダの夜にスイカを食べると、健康になるぞ。」と言われ、買ってみました。さすがに、真夏のスイカに比べると甘みが満足いくものではありませんが、寒い冬に食べるスイカの味が、何か特別に感じられました。



また、シャッベ・ヤールダの日には、おじいちゃん、おばあちゃんの家に集まる習慣があるそうです。そして、イランを代表する詩人・ハーフェズの詩を詠んだり、親戚で集まって話を花を咲かせたりして、夜を過ごすのです。ですから、この日はいつになく交通量が多く、また、夜になってケーキやお菓子の箱を持って歩く人の姿が、あちこちで見られました。おそらく、多くのテヘラン市民が、おじいちゃん・おばあちゃんの家に集まって、夜遅くまでホームパーティを楽しんだことでしょう。



## ◇日本ではクリスマスツリーやサンタクロースが飾られているけど・・・

日本では毎年、11月半ばを過ぎると、街中のデパートやケーキ屋さんなど、いたる所にクリスマスの飾りつけが見られ始めます。そして、12月に入ると、クリスマスのイルミネーションが点灯し、街は一気にクリスマスモード一色になります。日本ではごく当たり前になっているクリスマスですが、これはもともとキリスト教のお祭りでした。日本は、アメリカやヨーロッパの文化や風習を積極的に取り入れる傾向が強かったため、すくく定着して、毎年の冬の風物詩となっています。

では、ここイスラム教の国、イランではどうでしょうか・・・？イランはイスラム教の国であるため、クリスマスという文化はありません。従って、街中にクリスマスツリーやサンタクロースの飾りつけは見られません。また、クリスマスのイルミネーションもありません。「なあ～んだ。今年は、サンタクロースは来ないのか？」とうちの子どもも残念がっていました。いくつかのお店をよく見渡すと・・・ありました。ここイスラム教の国にも、クリスマスの習慣はあったのです。

その習慣をもたらしたのは、イランのお隣の国・アルメニア。といっても、どこか全く分からないと思いますので、ちょっと紹介。地図帳を開き、カスピ海という世界最大の湖を見つけてください。そのカスピ海の西に、小さな国があります。これがアルメニアです。実は、イランとアルメニアは歴史的に古いつながりがあり、今でもイランにはアルメニア人が多く住み、彼らのためのアルメニア教会やアルメニアスポーツコンプレックス(スポーツ施設)などがテヘランにもあります。イランは、イスラム教以外の宗教にも寛容な国で、市内にはイスラム教のモスク以外に、キリスト教の教会や、ユダヤ教のシナゴグ(礼拝堂)などもあります。キリスト教の教会がある辺りでは、クリスマス関連グッズを販売していますし、アルメニアスポーツコンプレックスでは、年に一度、クリスマスバザールが盛大に開催されます。家から歩いて行ける距離だったので、先日行ってみた所、会場いっぱいには所狭しと並べられたクリスマスグッズに、ここがイランであることをしばしば忘れてしまいました。また、私たちのような外国人がよく利用するデパート(写真右)やケーキ屋さんには、日本と同じようにクリスマスの飾りつけがされていました。店に入るとクリスマスツリーがあり、サンタクロースの置物やぬいぐるみがありました。聞く所によると、2年前はクリスマスなど、西洋の文化に対してとても規制が厳しかったそうで、街中でクリスマスの飾りつけをしているのは見られなかったそうです。しかし、現在では、そのような規制もないようで、わりと自由な雰囲気になってきているようです。



その習慣をもたらしたのは、イランのお隣の国・アルメニア。といっても、どこか全く分からないと思いますので、ちょっと紹介。地図帳を開き、カスピ海という世界最大の湖を見つけてください。そのカスピ海の西に、小さな国があります。これがアルメニアです。実は、イランとアルメニアは歴史的に古いつながりがあり、今でもイランにはアルメニア人が多く住み、彼らのためのアルメニア教会やアルメニアスポーツコンプレックス(スポーツ施設)などがテヘランにもあります。イランは、イスラム教以外の宗教にも寛容な国で、市内にはイスラム教のモスク以外に、キリスト教の教会や、ユダヤ教のシナゴグ(礼拝堂)などもあります。キリスト教の教会がある辺りでは、クリスマス関連グッズを販売していますし、アルメニアスポーツコンプレックスでは、年に一度、クリスマスバザールが盛大に開催されます。家から歩いて行ける距離だったので、先日行ってみた所、会場いっぱいには所狭しと並べられたクリスマスグッズに、ここがイランであることをしばしば忘れてしまいました。また、私たちのような外国人がよく利用するデパート(写真右)やケーキ屋さんには、日本と同じようにクリスマスの飾りつけがされていました。店に入るとクリスマスツリーがあり、サンタクロースの置物やぬいぐるみがありました。聞く所によると、2年前はクリスマスなど、西洋の文化に対してとても規制が厳しかったそうで、街中でクリスマスの飾りつけをしているのは見られなかったそうです。しかし、現在では、そのような規制もないようで、わりと自由な雰囲気になってきているようです。



## ◇日本では大晦日・お正月で慌ただしいけど・・・

今年の紅白歌合戦は、久しぶりに紅組が優勝したそうですね。我が家には日本のテレビを見るチューナーがないので、日本のテレビ番組を見ることは出来ませんが、風のうわさに聞きました。日本では、新しい年を迎えるにあたり、いろいろな準備をします。家の玄関にはわらで編んでだいたい(みかんのようなもの)をつけたお飾りをつけたり、丸く整えた鏡もちを床の間に飾ったり、家の門に門松をたてたり・・・。これらはいずれも、新しい年を迎えるために古来より日本人が毎年行ってきた習慣です。では、イランでは・・・？全くありませんでした。というのも、以前、ペルセポリスの紹介をした号で少し触れましたが、イランの人々にとっての新年は、まだ先なのです。この説明は、暦のお話をしないといけなくて少々ややこしくなります。

イランでは、「イラン暦(ペルシア暦)」という、イラン独自の暦を採用しています。1年は365日です。また、イスラム教の国なので、「イスラム暦(ヒジュラ暦)」もあります。イスラム暦では、1年は355日です。また、世界の流れで、「西暦」も使用しています。このように1つの国の中に3つの暦が存在する、不思議な国がイランです。しかし、イラン人にとって、一番なじみが深く、生活の中でも広く使われているのはイラン暦です。イラン暦の新年の幕開けすなわち正月、つまり1月1日は、日本などの使う西暦でいうと、3月21日に当たります。何で？これは、先ほど述べた太陽の動きと深い関係があります。しかし、これ以上暦の話が続くと、本題から離れてしまうので、これ以上ふれませんが、とにかく、世界の多くの国でカウントダウンが行われ、新年を祝う花火が打ち上げられたり、「あけおめ」メールが飛び交っていた瞬間、イランでは全く通常どおりの1日が過ぎていきました。イラン人に聞いても、「おまえの国(日本)で新しい年が来るのはいつか？」と逆に聞き返される始末で、西暦に対する意識はとて低くも思います。では、イランの人々にとっての新年とは、どんなものでしょうか？どんな準備があるのでしょうか？これは、まだ経験していないので聞いた話ですが、7つのSで始まるものを家に集め、飾りつけを行うそうです。7つのSとは、全てペルシア語でserke(酢)、sib(リンゴ)、sir(ニンニク)、sekke(貨幣)、somagh(ソマク:赤いスパイス)、sabze(草)、senjed(ホソバグミ:茶色のドングリのような実、食べられるらしい)のことです。これらはともに縁起がよいとされていて、それらを食卓に飾り、新年を祝うのです。

暦が違えば、節目となる日も違ってきます。そういえば、中国も日本から遅れることおよそ3週間後に中国の正月(旧正月)を迎えます。日本のメディアを通じて、世界から送られてくる情報を見ていると、毎年、世界の至る所での新年の瞬間が報道されてきましたが、普段と変わらない1日を過ごしている人々も意外と多いのかも知れませんね。

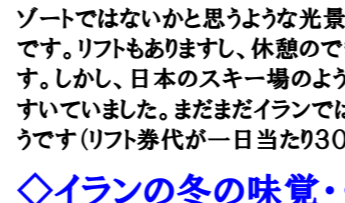
## ◇雪のよく降る街・テヘラン・・・

もうすでに何度もお伝えしましたが、イランはさまざまな気候をもつ国。イランでも北部に位置するテヘランの街は、標高1500~1700mくらい(鳥取県の大山の山頂付近)です。従って、冬の寒さは、岡山県と同じかそれ以上です。また、今年は例年になく雪が多く、すでに家の近くで4回ほど積雪を経験しました。テヘランに降る雪は、日本の雪と少し違います。それは、サラサラの雪。日本はどちらかというと大きく、湿った雪が降ります。この違いは、湿度の違いによるものです。テヘランは、とても空気が乾燥していて(湿度10%台)、雪に含まれる水分が少ないので、サラサラの雪となります。

乾燥といえば、冬の日の朝。日本だと、窓は結露して水滴がびしょりついているのではないのでしょうか？しかし、ここテヘランでは、冬の日の朝も、窓に水滴がつくことはありません。空気が乾燥し、空気中の水分がとても少ないため、結露することもないのです。窓に息を吹きかけてもくもることはほとんどなく、また、学校の教室の窓がくもって、そこに落書きができるということもないのです。



雪についての話題をもう一つ。テヘランから北に車で1時間ほど走った所に、ダルバンドサルという街があり、そこにはスキー場があります。ここは、毎年、テヘラン日本人学校の子供たちがスキー実習に訪れる場所です。冬休みのある日、今年のスキー実習の下見を兼ねて、学校の先生たちと一緒にスキーに行きました。日本を立つ前から、「イランにはスキー場があるから、スキー板を持ってくるように。」と言われていて、自分の板を用意してきました。久しぶりに滑ってみましたが、前に書いたように、サラサラの雪のため、シェパードを描いた粉雪が舞い、それが太陽の光に照らされてとても眩しく、また美しく感じられました。遠くにも雪を抱いた山々が連なり、一見すると、ヨーロッパのスキーリゾートではないかと思うような光景が広がっていました。スキー場の様子は日本とほとんど同じです。リフトもありますし、休憩のできるレストランもあります。教えてくれる人(インストラクター)もいます。しかし、日本のスキー場のように人が多くありません。休日でなかったせいもありますが、とてもすいていました。まだまだイランでは、スキーやスノーボードは一部のお金持ちの人のスポーツのようです(リフト券代が一日当たり30万リアル=日本円で2000円程度)。



## ◇イランの冬の味覚・・・

日本の冬の味覚と言えば何を連想しますか？岡山だったら、日生のカキです。他にも、日本海などで採れるカニ、おいしいミカンやリンゴなども冬の代表的な食物です。イランのスーパーマーケットや市場を春から夏、秋と見てきましたが、冬になって、それまでの季節に見られないものがいくらかあることに気がつきました。



まずは、多くの魚です。テヘランの魚屋さんには、大小さまざまな魚が並んでいます。大きなものでは、長さが1m近くあるものもあり、氷の上に、きれいに並べられています。基本的には白身魚で、中には、鯛に似た魚も並んでいました。イランを代表する魚は、カスピ海で捕れるチョウザメ。乱獲によって個体数が減っていますが、最高級のキャビアが採れることで有名です。魚屋の主人と話をしていると、「いいものがあるんだ！店の奥に来い。ただし、写真はダメだぞ！」と店の奥に案内され、見せてくれたのは黒いダイヤ、とも言われるイラン産の最高級キャビア。日本で買うと、100gがウン万円もする超高級品だそうです。さすがに写真禁止だ



けあって、味見をさせてはくれませんでした。丸いケースにびしょりとすきまなく詰まっているキャビアを見て、その美しさに圧倒されました。魚以外にも、冬ならではのものがあります。野菜ではカブやダイコン、ハクサイなど。日本でも冬の鍋物に重宝しますが、イランでもこれらの野菜が冬になると出回ります(残念ながら夏には買うことはできないようです)。加工品では、ビート(てんさい=さとうだいこん)を煮込んだもの。紅色のたれの中に、これまた紅色のビートが置かれ、湯気を上げています(写真右)。さとうだいこんというだけあって、味は甘い。商店街の軒先にはこれらを売るコーナーができ、寒い日に暖かな湯気を上げて、道行く買い物客の目をくぎづけにしています。果物ではみかん。これは、日本でよく出回っているみかんと同じ外見は全く同じです。味は、少し酸っぱいかな？でも、日本っぽさを味わうことができ、我が家では常に食卓をいっています。また、前に書いたザクロや、茶色の毛におわれた椰子(やし)の実なども果物屋さんの店頭で並べられています。バナナやリンゴなど、四季を通じて店頭で並ぶ果物もありますが、季節によって見られたり見られなくなったりする果物に旬のありがたさを感じずにはいられません。



# باد از تهران

～ テヘランからの風 ～ 第16号 2月3日配信

伊里中学校の皆さん、こんにちは。1月も気がつけば過ぎ去り、一昨日から2月です。時が経つのは本当に早いもので、平成23年度も残すところ、あと2か月弱となりました。岡山県の私立入試も、終わりましたね。3年生のみなさん、私立入試お疲れさまでした。自分の力を十分に発揮することができましたか？

そういえば、先日、インターネットからうれしいニュースが届きました。備前市出身の重友梨佐選手が大阪国際女子マラソンでみごと優勝。今年夏に行われるロンドンオリンピックの最有力候補になったそうですね。みなさんと同じ備前市から、世界で活躍するアスリートが生まれるかもしれませんね。

時を同じくして、先日、テヘラン日本人学校の同僚の先生も、イランの隣の国であるアラブ首長国連邦のドバイであったマラソンに出場し、みごと42.195kmを完走したそうです。伊里駅伝も先日行われたことでしょう。つらく、きびしいマラソン・駅伝ですが、必ずゴールがやってきます。勉強も、学校生活も、部活動も…。苦しいことを乗り越えた先には、必ず、明るい未来が待っています。私たちのテヘラン日本人学校も、イランという日本と比べると決して恵まれた環境ではない中で、そこに暮らす子どもたちのために日々力を合わせて頑張っています。今回は私の勤務するテヘラン日本人学校での1年間をふり返ってみたいと思います。

## ◇イランの良いところを見つけよう

「日本は世界でも指折りの工業国で、しかも勤勉で誠実。だから、日本は私が尊敬する国だ。」イラン人に日本のことを聞くと、10人中10人から、同じような答えが返ってきます。「おまえは何人だ？」と聞かれ、「ジャポニー(日本人だ。)」と答えると、決まって、「OK」と言います。何がOKなのか分からないのですが、とにかく、イラン人にとって、日本は「OK」な国、つまり、好きな国なのでしょう。日本人として悪い気はしないのですが、私はいつもこう付け加えます。「イラン ハム ヘイリー フーペー(イランもとてもいい国だよ。)」と。私たち、海外の日本人学校で働く教師にとって、そこで学習する子どもたちにその国のことについて教え、また、それによってその国を好きになってもらうことはとても大切なことです。こういった教育を難しい言葉で「現地理解教育」といいます。

今年度、社会の授業や総合的な学習の時間で、何度も校外に出て、いろいろな施設を見学したり、話を聞いたりしました。活動のキーワードは、「イランって、すごいんだよ。」。その中で、私が関わった活動をいくつか紹介します。実際に見学したり、話を聞いたりすることはできませんが、みなさんも、これを読むと、ちょっと物知りになるかもしれませんよ。



イランの街には、たくさんのお車が走っています。高速道路網も整備され、しかも、料金はただ。日本のようにちょっと走っただけで数百円もとられることなくありません。逆に鉄道は日本の方が縦横に通っていて、イランは車社会だな、と思わされます。では、そのような車社会の国・イランの自動車はどうなっているのでしょうか？イランは、世界で13番目の自動車生産国(約160万台)だそうです。ちなみに1位は、中国(約1800万台)。2位は、日本(約960万台)。3位はアメリカ合衆国(約770万台)です。そのような自動車生産がさかんな国・イランの自動車工場を小学3年生～6年生までで見学しました。場所は学校から西へ車で約30分の工場地帯。まわりには、大きな工場がたくさん並んでいます。その一角に、フランスの自動車メーカー「ルノー」や、イランの自動車メーカー「サイバ」を生産している「パルス・ホドロ(パルス=ベルシアの、ホドロ=工場)」がありました。中にはいると、オートメーション化された機械が数多く並び、広い工場内にもかかわらず、作業員はまばらです。多くの機械が動き、順番に溶接や内装部品の取り付け、ドアやタイヤの取り付け、キズの有無のチェックなどの工程を見学することができました。(写真左)岡山県には、水島コンビナートに三菱自動車の工場がありますが、みなさんが小学5年生の社会科の授業で学習した、日本の自動車工場と変わらない光景が広がっていました。しかも、日本と違って作業をしているすぐそばまで行って見学をすることができます。休憩している作業員とおしゃべりすることもできます。日本よりもおおらかな対応にびっくりしながらも、なかなか見ることができない自動車生産の現場を見ることができました。ここでできた自動車は、テヘラン市内はもとより、イラン全土にキャリアカーで運ばれていきます。イラン国内で生産された自動車は、ヨーロッパ車や日本車、韓国車などの輸入自動車よりも安く、イラン人にとってお手頃価格のようです。(ちなみに、この工場では少数ではありますが、日産自動車も生産しています。部品のうちのいくつかは日本から船や飛行機で運ばれ、ここで組み立てられるそうです。)



次に、イランにある古代遺跡からの出土品などを一堂に集めた「イラン考古学博物館」に、全校児童生徒で行きました。ここは、テヘラン市内の中心エマーム・ホメイニ通りにあり、近くには中央官庁やかつての王様の宮殿、また商業の中心パーザールなどもある、テヘランの心臓部です。堂々とした風格の入口(写真左上)から中にはいると、まず、左側に古代バビロニア王国のハンムラビ王が定めたという、「ハンムラビ法典」(写真左)があります。それを見ながら順路に従って歩いていくと、年代順につぼや祭りに使ったと思われる水差し、動物の置物などが並んでいます。驚くべきはそのつくられた年数。一番古いものでB. C. 6000年、つまり今から8000年前の出土品が多数あるということです。8000年前と言えば、日本では、縄文時代。その頃に、すでに高度な文明をもち、支配者がいたということを物語っています。そして、この博物館のハイライトは、ベルセポリスから出土した宝物の数々。先の通信(11号)でもお知らせしましたが、ベルシア帝国の王・ダレイオスI世は、イラン南部の地に広大な都を建設し、西はギリシア・北アフリカから東はインドまでを支配する大帝國を築き上げました。毎年新年のお祭りの時には、使者が全国からみつぎものを持って都にやってきました。これら今から2500年ほど前に、使者たちが持ち寄った宝物の数々が展示されています。また、ベルセポリスの石段や破壊をまぬがれた石像なども展示されており、テヘランにいながらにして、イラン全土から集められた超一流の美術品・発掘品にふれることができる施設となっています。

もう一つは、イランの首都・テヘランにある高いタワーです。名前を「ミラッド・タワー」と言います。高さは435m(世界第7位)。建設中の東京スカイツリー(634m)には及びませんが、イランでは最も高い建造物です。完成は今から4年前ですが、外国人向けの公開は去年の春になって始まったばかりでした。付近は、テヘラン国際貿易コンベンションセンターとして整備されています。タワー上部の展望台からは、700万人以上がくらすイランの首都・テヘランの街をぐるり360度見渡すこ



とができます。ここからは、テヘランが山のある北部からなだらかに下っている様子や、北にそびえるアルボルズ山脈のふもとまで、住宅地が迫っている様子、先に書いた縦横に走る高速道路などを手に取るように見ることができます。ところどころ、緑色に見えるのは大きな公園や道路沿いの緑地。あとは一面、白っぽい、あるいは茶色い壁の建物や高層ビルばかり。どこの国でも、首都への人口の集中は同じ光景のようです。



## ◇日本人としてのほこりをもとう

イランで生活をしていると、とかく日本のことを忘れがちですが、日本にいたるときと同じように、日本の伝統的な習慣や文化に親しむこと、日本の良さに気がつくことはとても大切なことです。テヘラン日本人学校には、季節ごとに日本的な行事があります。先日行われたのは、もちつき大会。何と、ここイランの日本人学校には手作りの臼(うす)と杵(きね)があるのです。3年生のみなさんは、1年生の時に、ふれあい学級の方と一緒にもちつき大会をしたのを覚えているでしょうか。あのように、もちつき大会をしました。日本人学校の先生だけでは人手が足りないの、ほとんどの保護者の方の協力を得て、もちつき、雑煮作り、きなこもちづくりをしました。当日は、とても寒い日だったのですが、学校の校庭は寒さを吹き飛ばす熱気でした。また、これからのシーズンは、日本人学校のロビーには、お雑さまが並びます。これは、在イラン日本大使館の所有するお雑さまを借り、3月3日の桃の節句を祝うもので、ロビーがとても華やかになるそうです。行事ではありませんが、私が取り組んだ「日本的なもの」として、7月の七夕飾りや、中学生の保健体育の武道があります。中でも、武道では、去年伊里中学校で取り組んだ柔道に加え、相撲もしました(なぜか、土俵マットと体育用まわしがあつたのです…)。初めての試みでしたが、中学部の生徒たち(男子2人、女子3人の計5人)はとても楽しく授業に取り組んでくれました。



(写真左より) みんなでベクタン、ベクタン/PTA会長と日本人会からの助っ人/講堂で柔道の授業) さて、去年3月11日、未曾有の大津波が東日本各地を襲いました。イラン人から何度となく言われた「ソナミ」という言葉(イランの公用語であるペルシア語では、津波をこう発音するのです)。日本人学校でも、地震で被災された方に一刻も早く立ち直してほしい、元気を出してほしいという思いから、秋の学芸発表会(文化祭のようなもの)で東北地方の民謡を合唱・合奏したり、「ふるさと」をテーマに学年ごとに発表したりしました。私の受け持つ小学校5・6年生は、学年発表で小泉八雲の「怪談～KWADAN～」の劇をしました。



さて、去年3月11日、未曾有の大津波が東日本各地を襲いました。イラン人から何度となく言われた「ソナミ」という言葉(イランの公用語であるペルシア語では、津波をこう発音するのです)。日本人学校でも、地震で被災された方に一刻も早く立ち直してほしい、元気を出してほしいという思いから、秋の学芸発表会(文化祭のようなもの)で東北地方の民謡を合唱・合奏したり、「ふるさと」をテーマに学年ごとに発表したりしました。私の受け持つ小学校5・6年生は、学年発表で小泉八雲の「怪談～KWADAN～」の劇をしました。

明治時代に日本にやってきた西洋人、その名はラフカディオ・ハーン。日本の各地を取材する中で、日本の古き佳き習慣や伝統、風俗などに心打たれ、やがて日本を第二のふるさととして選び、イラン人になる決意を固めます。そして、民謡や伝承をモチーフにした、独自の世界を作り上げます。それが「怪談」なのです。5・6年生7人が力を合わせ、キャストから照明、音響、舞台までを分担して行いました。「自分たちの力でできることをやろう!」そして、「観るものに感動を与えよう!」をテーマに、何度も何度も練習を重ね、本番では多くの保護者、日本人会の方にお褒めの言葉をいただきました。日本から遠く離れた地・イランに住んでいる子どもたちですが、日本人としてのハートを決して忘れることなく、日本のもっている良さを再認識してもらえればと思い、日々学校で子どもたちと接しています。

## ◇イランと日本との架け橋に…

イランの素晴らしさを知り、また、日本の良さを再認識した子どもたち。私たちが次に取り組んだのは、同世代の日本人・イラン人の交流でした。長年、テヘラン日本人学校はテヘランにあるプリティッシュスクール(イギリス人学校)と交流してきた歴史があります。今年度も、交流の予定でしたが、先のイギリス大使館襲撃事件で両国関係が悪化し、同校が閉鎖されたため交流ができなくなってしまいました。そこで、日本大使館より「イランで日本文化週間を開催する」との連絡が入り、日本人学校とイラン人学校との交流会計画が持ち上がったのです。

私は、かねてからイランの教育事情やどのような学習をしているのかに興味があったので、この取り組みをととても楽しみにしていました。計画にたずさわることはできませんでしたが、当日、子どもたちとともに交流会に参加し、とても貴重な体験をすることができました。

ここでイランの教育事情について少しふれます。イランの学校は毎年、9月21日(西暦)からスタートします。これは、前号で書きましたが、イラン暦の新年が3月21日(西暦)にスタートするのと関係が深いです。暦は3月21日スタートですが、学校などはそれから半年後の9月21日(西暦)スタート、つまり、秋の始まりとともに1年間のカリキュラムがスタートします。小学校は5年間、中学校は3年間。その後は高等教育を受けたり、働いたり。ちなみに、小学校の前にプレスクールという日本ではいうところの幼稚園があります。小学校から完全に男女別習となり、男子校・女子校と分かれていきます。これは、イスラムの教えによるため、男女がともに机を並べて勉強するのはイランの学校ではありません(日本人学校は例外的に男女共習が認められています)。授業は朝から昼までで、小学校の子どもたちは午後1時半くらいには帰宅することが多いです。その後、習い事に行く人、スポーツクラブに行く人などはそこに行きます。学校の授業内容は日本とほとんど同じですが、日本人学校の近隣の学校の場合、校庭がせまいので、体育はあまり活発でないようです(スポーツをしたい人は、クラブに通います)。公立と私立によってカリキュラムには差があり、私立は少人数のため、音楽や芸術、ダンスなどの表現活動が盛んだそうです。また、イランでは女性は人前で歌を歌ってはならないという習慣があるため、公立学校では音楽の授業はないです。しかし、私立学校では逆に、積極的に音楽指導をしているそうです。



このように、日本と大きく違う教育環境、教育システムをもつイランの学校。しかし、そこに通っているのは、目をキラキラ輝かせた子どもたちです。今回の交流では、日本の伝統的な遊びである、けん玉と折り紙を披露し、ともに練習したりついたりしました。その後、1つのテーマに基づいてそれぞれが絵を描いて作品として仕上げたり、パッチワークのように布きれを使って相手の子の顔を布に描いたり…。芸術センスの豊かなイランの子どもたちはスラスラと題材に関係ある絵を描き始めます。日本人学校の子どもたちは、はじめ緊張していましたが、そこは同年代の子どもたち。すぐにうち解けて、ペルシア語や英語、はたまたボディランゲージなどをフルに活用し、楽しく作品をつくらせている姿が印象的でした。幼いうちに外国人とともに何か活動したり、友達になつたりすることは日本にいたらあまり経験する機会はないでしょう。しかし、ここテヘランでは、周りを見渡せば、外国人ばかりです。そういった環境で学校生活を送り、双方の国の文化や、人のもつ温かさなどを実感することは、将来にわたっての財産となることでしょう。次号は2月後半の予定(イランの砂漠都市・ヤズドについて)



(写真左より布で作ったパッチワーク作品/女子校の皆さんと/男子校の皆さんと)

# باد از تهران

～ テヘランからの風 ～ 第17号 2月20日配信

伊里中学校の皆さん、こんにちは。先週土曜日の夜に、「備前平野に春を呼ぶ」といわれる西大寺会陽(はだかまつり)が行われたそうですね。私も、日本にいるときには毎年参加していました。このイベントが終わると岡山県南部の寒さも少し和らぎ、だんだんと日が長くなるにつれ、「春が近づいているなぁ」と感じたもので。3年生の皆さん、県立自己推薦入試、お疲れさまでした。先日、内定通知の発表があったことだと思います。合格した皆さん、おめでとう！また、残念な結果だった人も、次の入試で合格すればいいんです。気持ちを引き締め、一般入試に挑戦してください。全員が希望する路(みち)に進めることを祈っています。

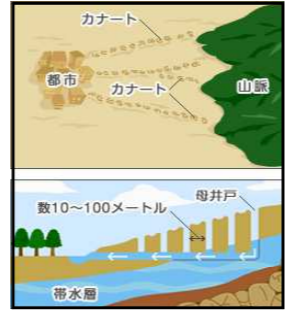
さて、ここテヘランを取り巻く国際情勢は緊迫していますが、私たちテヘラン日本人学校では、子どもたち、職員ともに「笑顔」と「元気」をモットーに、日々楽しく過ごしています。あと1か月で小学6年生、中学3年生は卒業です。残り1か月の毎日を大切に過ごしています。伊里中学校3年生の皆さんも、通い慣れた伊里中ででの生活もあとちょうど1か月となりましたね。毎日を大切に、たくさんの思い出をつくってもらいたいです。

今号は、先月半ばに訪れた、イラン中部の街・ヤズド(YAZD)についてです。これまでイランのいくつかの都市を紹介してきましたが、今回お伝えするヤズドの街は、イラン＝砂漠というイメージにぴったりの街。そして、古くからの町並みが残る、とても素敵な街でした・・・。

## ◇夏は40度以上、冬は氷点下、年間降水量50mm以下の過酷な気候

砂漠の気候は極端です。年間を通して快適な季節というものほとんどなく、初夏から初秋にかけては最高気温が40度を超える灼熱の大地に、また、冬は寒風ふきすさぶ底冷えのする大地となります。実は、イランの国土の大部分はこのような気候の砂漠がしめいて、農業や経済活動はおろか、人が住むことさえままなりません。しかし、古来より、イラン人はそのような、言うなれば「不毛の大地」を利用する知恵を身につけてきました。ここヤズドをはじめ、砂漠の中には大小さまざまな都市が点在しています。そして、周りには緑の畑や数多くの樹木があります。年間降水量50mmにも満たない場所で、人々はどうして生活をして、命をつないできたのでしょうか・・・。

人間の生命の源は水。しかし、砂漠では水を手に入れることは容易ではありませんでした。まず、雨が降らない。また、たとえ降ったとしても、乾燥しているため、わずかに降った雨は大地にしみこむ前に蒸発してしまいます。このような条件でどうやって生きていけばいいのか・・・。昔の人は考えました。イラン中部はイラン高原といって、高地なので、周りには高い山がありました。その山頂付近には、冬になると雪が降りました。その雪融け水を利用して、高水層を流すようにしたのです。しかし、日本のように雪融け水が川を流れることはありませんでした。なぜなら、空気が乾燥しているため、流れているうちに蒸発してしまからです。雪融け水は地下を流れていました。その地下水が流れる道は・・・。人間が見つけた水路なのです。イランでは、砂漠地帯の地下に流れる水路をガナート(QANAT) (日本の社会の教科書にはカナートと表記されることが多い)といえます。



ガナートは2,500年前(アケメネス朝ペルシア＝ペルセポリスをつくった時代)からつくられていたという歴史が残っています。

ヤズドに、「ヤズド水博物館」というガナートの歴史などを解説した博物館があります。ここには、実際に使われていたガナートが残っています。また、ガナート作りに使った道具や水をくむ様子(写真左上)が写真や実物資料を展示して紹介されています。ガナートの深さはおよそ15～20m。急な階段を40～50段くらい下りていったところに、幅20cm程度の、石で囲まれた用水路がありました(写真左)。このガナートには、水が流れていませんでしたが、他の場所のガナートを見学したときは、水が流れていました。

イランでは、今でもこのようなガナートが30,000本以上使用されているそうです。また、この技術はイランだけでなく、周辺諸国にも伝わっていると言われています。他にも、水を蓄えておくための貯水池も数多く残っています。これは、アブ・アンバールと呼ばれ、独特の形(写真右奥)をしています。モスク(礼拝堂)の天井のように、タマネギ型をした土作り建物があります。周囲には煙突のようなものが4本立っているのが普通です。周囲の煙突をよく見ると、上部に穴が空いているのが分かります。この煙突は、バード・ギール(風採り塔)(写真右)と呼ばれています。夏が近づくと、ヤズドなど砂漠地帯の日中の気温は40度を超えるようになります。また、強烈な太陽光の照り返しによって上昇気流つまり風が発生します。

古代の人々は、この砂漠特有の自然現象を利用して、水を冷やすことを思いつきました。アブ・アンバールに蓄えられた水には直接太陽の光が当たりませんが、すぐ外は灼熱の世界なので、水は温まります。この水の温度を下げるために、バード・ギールから入ってきた風を利用しました。灼熱の大地を吹く風ですが、バード・ギールから取り込まれた風は、太陽の光が届かない地下へと吹いていく間に冷やされ、水の温度を下げる効果

がありました。今、ヤズドの街を高いところから見ると、街の家々の上には、たくさんのバード・ギールがあります。これらは、現在でも天然のクーラーとして利用されています。ヤズド位置の高さを誇るバード・ギールがある庭園に行ったときのことです。当日は、朝から曇りがちで、昼から強風が吹き荒れ、とても寒い一日でした。バード・ギールの真下に立つと、塔の頂上から吹き降ろす風を体全体に受け、身も凍るようでした。ガイドさんに「ここは夏に来るといいぞ。周りは暑くてもここは快適さ。今(冬)は、とても寒いからお勧めしない。」といわれました。

ヤズドに限らず、イランの砂漠都市に住む人々は、過酷な自然条件にもめげず、長い歴史の中で自然とうまく向き合ってきたんだなぁと感じました。気候などの自然条件を人間の力によって変えることはできません。であるならば、その自然条件のなかでいかに快適に生きていくか。今、日本は東日本大震災による福島第一原子力発電所の災害で、国内の原子力発電所がほとんど稼働(かどう)していないと聞きます。いつでも好きなときに好きなだけ使えた電気が、足りなくなる日が来るかもしれません。日本の気候、気象条件の中で、電気だけに頼ることなく快適に生きていくにはどうすればいいか。そのヒントが、もしかしたらヤズドの街にはあるのかもしれない・・・。

## ◇ヤズド発祥の宗教・ゾロアスター教

通信第11号(ペルセポリス特集)でふれましたが、古代イランを支配していたアケメネス朝ペルシアの時代より、イスラム教が入ってくるまでの間、イランではゾロアスター教という宗教が中心となっていました。時の王たちも熱心に信仰していたことでしょう。サーサーン朝ペルシアの時代(紀元後226年～651年)には、ペルシア帝国の国教となっていました(第11号で書いた「アケメネス朝ペルシアでは、国の宗教=国教となり、国王の保護のもとにおかれた。」「は誤りで、正しくはサーサーン朝ペルシアの時代から)。このゾロアスター教と関係が深いのが、ヤズドです。

ヤズドには、多くのゾロアスター人が今でも住んでいます。彼らはイスラム教の国・イランでも、宗教の自由を保障され、生活をしています。ヤズド市内には、多くのゾロアスター教の神殿があります。一般的には、私のような観光目的で訪れる異教徒は神殿に入ることはできないのですが、観光客でも神殿内部を見学でき



るところがあり、そこを訪れました。人が火をととても大切にしているのわかります。神殿の中央には、150かけている聖火が燃えていました。は、ゾロアスター教のシンボル。



神殿の名前はアーテシュ・キャデ(火の家)(写真左)。ゾロアスターとは、この内部を見ると分0年前から絶やさず燃え続また、神殿の正面上部にアフラ＝マズダ(写真右)



が飾られていました。これは余談ですが、ゾロアスター教のシンボル・アフラ＝マズダはアルファベット表記をすると、「AHURA=MAZDA」となります。おや、このつづり、日本のどこかで見たつづりではありませんか??

そうです。広島市に本社のある日本の自動車メーカー、マツダのつづり(MAZDA)と同じなのです。マツダ自動車の松田社長は、自分の姓と、古代イランのゾロアスター教の神様・アフラ＝マズダをかけて、社名にしたと言われています。これは、イラン人も知っているエピソードで、日本の自動車メーカーが自分の国の宗教の神様の名前を社名につけたことに誇りをもっているようです。(ちなみに、日本のマツダ車はイランでもたくさん走っています。)

ゾロアスター教の聖地は、イラン国外にも何カ所かあるそうですが、イランでの聖地は、ヤズド市街から車で片道2時間弱の険しい山に囲まれた場所にあります。そこは、岩をくりぬいてつくられたほら穴のようになっていて、大きな木が生えています。周りには木という木が見当たらない中で、ここにだけ巨木が生えている・・・。つまり、ここには水があるのです。よく見ると、天井部分の岩肌からポタポタと滴のように水が落ちています。その様子から、この地が名付けられました。水がしたたる音をゾロアスター人は「チャク・チャク(CHAK CHAK)」と表現したのです。以来、ここはイランにおけるゾロアスター教の聖地となりました。毎年6月のお祭りでは、国内外から大勢のゾロアスター教徒が巡礼に集まります。

また、ヤズド市街から車で15分ほど走ると、建物がとぎれた先に小高い丘が2つ見えます(写真右)。ここは、ペルシア語でダフメと呼ばれる場所で、日本語では「沈黙の塔」と訳されることが多いです。古来より、ゾロアスター人は、火・水・土をととても大切にしてきたことは以前(11号)で紹介したとおりです。ゾロアスター人にとってこの3つを汚すことは許されませんでした。では、人が死ぬとどうしたのでしょう・・・。日本のように火葬(かそう)にすると、火がけがれます。また、なきがらを土に埋める土葬(どそう)にすると、土がけがれます。そこで、ゾロアスター人は、火も水もけがさない死者を葬(ほうむ)の方法を考えつきました。それが鳥葬(ちようそう)と呼ばれる、独特の方法です。

ゾロアスター人の誰かが亡くなると、人々がそのなきがらをかいつて丘の上に乗ってきます。そして、丘の上の鳥葬場に安置します。やがて、鳥がやって来て死者をつつき始めます。そして、やがて死者は鳥によって喰い尽くされてしまうのです。こうやって、鳥の力によって自然に還す方法をとっていた(1930年代に禁止となり、今は、土葬となっているそうです)あとが、残っているのです。また、そのふもとは、法律によって鳥葬が禁止となって以降、亡くなったゾロアスター人の墓が整然と並んでいました。イスラム教徒のお墓との1番の違いは、墓石にアフラ＝マズダが描かれていることでしょうか。これまた余談ですが、この墓地の一角には墓をつくるための材料がこんもりと置かれていました。ガイドさんに聞くと、お墓をつくるのは家族や友達、親戚の男性が中心だそうです。レンガで型を作り、レンガとレンガをセメントで固定し、土をかぶせる・・・。そしてその中に遺体を安置する・・・。日本の基準からすると理解しにくい部分ではありますが、家族や親族の結束がとても強いイランならではの。

ゾロアスター人の墓が整然と並んでいました。イスラム教徒のお墓との1番の違いは、墓石にアフラ＝マズダが描かれていることでしょうか。これまた余談ですが、この墓地の一角には墓をつくるための材料がこんもりと置かれていました。ガイドさんに聞くと、お墓をつくるのは家族や友達、親戚の男性が中心だそうです。レンガで型を作り、レンガとレンガをセメントで固定し、土をかぶせる・・・。そしてその中に遺体を安置する・・・。日本の基準からすると理解しにくい部分ではありますが、家族や親族の結束がとても強いイランならではの。

## ◇土壁が美しい旧市街

テヘラン暮らしも10か月を超えると、首都にありがちな高層ビル、高層マンションの林立する光景に飽きてきます。その点、ヤズドは街全体がとても低く、高層マンションや高層ビルはほとんど見られません。また、11世紀以降(今からおよそ1000年前)から建てられたヤズド旧市街はとても美しいです。街のシンボルは大きく2つ。1つは、イランで最も高いミナレット(モスクにある尖った塔)をもつ、マズジェデ・ジャーメ(写真左上・中)。行ったときはちょうど金曜日の早朝で、礼拝を終えた人々がモスクから外へ出て行く光景に出くわしました。シーンと静まりかえったモスクの中を真っ黒なチャドルを身にまとった女性が歩くさまは、まさにイスラムの国を象徴する光景です。もう一つのシンボルは、アミール・チャグマールのタクキエと言います(写真上の右)。これは、モスクやバーザール(商店街)、カルバーン・サライ(かつて砂漠を旅した隊商たちが寝泊りするための隊商宿のこと)などの複合施設です。残念ながら、この上に登ることはできませんでしたが、登れば、ヤズド市内を一望できるすばらしい景観が広がっているそうです。また、どちらのシンボルも、夜になるとライトアップされ、日中とは違った幻想的な印象を与えてくれます。他にも、ここヤズドを初めて訪れた西洋人であると言われるマルコ＝ポーロの名がついた時計塔や、往時の公衆浴場(ハンマーム)を改装したチャイハーネ(喫茶店兼食堂)(写真左下)など、テヘランでは見ることのできない歴史的建造物の数々に出会うことができました。そして、これらのスポットを結ぶ道は土壁におおわれ(写真左上)、また、所々日除けのためにトンネル状になっています。街の喧騒も聞こえない道を歩いていると、自分がいつの時代かにタイムスリップしたかのような、不思議な感覚を覚えます。この道を歩いていくと、広場に出ました。ここでは、子どもたちがサッカーをしていました(写真右)。土壁に囲まれた中でわいわいとサッカーに興じる子どもたちが、とても無邪気で、景色の「静」と、子どもたちの「動」との対比がとても印象的でした。

また、11世紀以降(今からおよそ1000年前)から建てられたヤズド旧市街はとても美しいです。街のシンボルは大きく2つ。1つは、イランで最も高いミナレット(モスクにある尖った塔)をもつ、マズジェデ・ジャーメ(写真左上・中)。行ったときはちょうど金曜日の早朝で、礼拝を終えた人々がモスクから外へ出て行く光景に出くわしました。シーンと静まりかえったモスクの中を真っ黒なチャドルを身にまとった女性が歩くさまは、まさにイスラムの国を象徴する光景です。もう一つのシンボルは、アミール・チャグマールのタクキエと言います(写真上の右)。これは、モスクやバーザール(商店街)、カルバーン・サライ(かつて砂漠を旅した隊商たちが寝泊りするための隊商宿のこと)などの複合施設です。残念ながら、この上に登ることはできませんでしたが、登れば、ヤズド市内を一望できるすばらしい景観が広がっているそうです。また、どちらのシンボルも、夜になるとライトアップされ、日中とは違った幻想的な印象を与えてくれます。他にも、ここヤズドを初めて訪れた西洋人であると言われるマルコ＝ポーロの名がついた時計塔や、往時の公衆浴場(ハンマーム)を改装したチャイハーネ(喫茶店兼食堂)(写真左下)など、テヘランでは見ることのできない歴史的建造物の数々に出会うことができました。そして、これらのスポットを結ぶ道は土壁におおわれ(写真左上)、また、所々日除けのためにトンネル状になっています。街の喧騒も聞こえない道を歩いていると、自分がいつの時代かにタイムスリップしたかのような、不思議な感覚を覚えます。この道を歩いていくと、広場に出ました。ここでは、子どもたちがサッカーをしていました(写真右)。土壁に囲まれた中でわいわいとサッカーに興じる子どもたちが、とても無邪気で、景色の「静」と、子どもたちの「動」との対比がとても印象的でした。

旅の魅力は何でしょう?めずらしい景色、おいしい食べ物、おみやげ・・・。人それぞれ、「旅」に求めるものはさまざまです。私が旅に求めるものは、「非日常への好奇心」、そして「旅先での出会い」です。今回の旅は、家族をテヘランに残しての同僚の先生との2人旅でした。今回は、私のペルシア語の力がどこまで通用するか、英語の表記をどれだけ読めるかを確かめるため、ガイドの人に頼らずに出かけました。頼るべくは自分の語学力と同僚の先生のみ。そんな中、いくつかのハプニングがありました。予定していたバスターミナルと違うところに到着したり、ホテルが予想以上に遠かったり、観光場所が閉まっていたり・・・。そんなハプニングの中、心に残る旅ができたのは、当地・ヤズドに暮らしている人々でした。2日間に渡って、車に乗せてくれ、歩いては行けない観光地に連れて行ってくれたタクシードライバー(写真左下)。また、ホテルに向かうためにトボトボと夜道を歩く私たちを車に乗せてくれ、親切にホテルまで送り届けてくれた人。観光場所が閉まっていた、がっかりしていた私たちに声をかけてくれた食堂のお客さん・・・。日本人と知って目の色を変えて話しかけてくれる人もたくさんいます(商売目的ではなく)。イラン人は、本当に親切で、おもてなしの心(ホスピタリティ)にあふれていると思います。海外との関係が悪化している現在ですが、決して国民は悪い人ではありません。欧米諸国による攻撃の対象となる国ではないのです。なかなかイラン国外にいる人たちから見ると、想像できないかもしれませんが、実際に暮らしてみると切に思います。私たちのように、イランに暮らす外国人は、外にむけて発信する必要があると思います。それによって、より多くの人が本当のことを知ることで、正しい行動ができるのではないのでしょうか。次号は3月初旬配信予定

旅の魅力は何でしょう?めずらしい景色、おいしい食べ物、おみやげ・・・。人それぞれ、「旅」に求めるものはさまざまです。私が旅に求めるものは、「非日常への好奇心」、そして「旅先での出会い」です。今回の旅は、家族をテヘランに残しての同僚の先生との2人旅でした。今回は、私のペルシア語の力がどこまで通用するか、英語の表記をどれだけ読めるかを確かめるため、ガイドの人に頼らずに出かけました。頼るべくは自分の語学力と同僚の先生のみ。そんな中、いくつかのハプニングがありました。予定していたバスターミナルと違うところに到着したり、ホテルが予想以上に遠かったり、観光場所が閉まっていたり・・・。そんなハプニングの中、心に残る旅ができたのは、当地・ヤズドに暮らしている人々でした。2日間に渡って、車に乗せてくれ、歩いては行けない観光地に連れて行ってくれたタクシードライバー(写真左下)。また、ホテルに向かうためにトボトボと夜道を歩く私たちを車に乗せてくれ、親切にホテルまで送り届けてくれた人。観光場所が閉まっていた、がっかりしていた私たちに声をかけてくれた食堂のお客さん・・・。日本人と知って目の色を変えて話しかけてくれる人もたくさんいます(商売目的ではなく)。イラン人は、本当に親切で、おもてなしの心(ホスピタリティ)にあふれていると思います。海外との関係が悪化している現在ですが、決して国民は悪い人ではありません。欧米諸国による攻撃の対象となる国ではないのです。なかなかイラン国外にいる人たちから見ると、想像できないかもしれませんが、実際に暮らしてみると切に思います。私たちのように、イランに暮らす外国人は、外にむけて発信する必要があると思います。それによって、より多くの人が本当のことを知ることで、正しい行動ができるのではないのでしょうか。次号は3月初旬配信予定



旅の魅力は何でしょう?めずらしい景色、おいしい食べ物、おみやげ・・・。人それぞれ、「旅」に求めるものはさまざまです。私が旅に求めるものは、「非日常への好奇心」、そして「旅先での出会い」です。今回の旅は、家族をテヘランに残しての同僚の先生との2人旅でした。今回は、私のペルシア語の力がどこまで通用するか、英語の表記をどれだけ読めるかを確かめるため、ガイドの人に頼らずに出かけました。頼るべくは自分の語学力と同僚の先生のみ。そんな中、いくつかのハプニングがありました。予定していたバスターミナルと違うところに到着したり、ホテルが予想以上に遠かったり、観光場所が閉まっていたり・・・。そんなハプニングの中、心に残る旅ができたのは、当地・ヤズドに暮らしている人々でした。2日間に渡って、車に乗せてくれ、歩いては行けない観光地に連れて行ってくれたタクシードライバー(写真左下)。また、ホテルに向かうためにトボトボと夜道を歩く私たちを車に乗せてくれ、親切にホテルまで送り届けてくれた人。観光場所が閉まっていた、がっかりしていた私たちに声をかけてくれた食堂のお客さん・・・。日本人と知って目の色を変えて話しかけてくれる人もたくさんいます(商売目的ではなく)。イラン人は、本当に親切で、おもてなしの心(ホスピタリティ)にあふれていると思います。海外との関係が悪化している現在ですが、決して国民は悪い人ではありません。欧米諸国による攻撃の対象となる国ではないのです。なかなかイラン国外にいる人たちから見ると、想像できないかもしれませんが、実際に暮らしてみると切に思います。私たちのように、イランに暮らす外国人は、外にむけて発信する必要があると思います。それによって、より多くの人が本当のことを知ることで、正しい行動ができるのではないのでしょうか。次号は3月初旬配信予定



# باد از تهران

～ テヘランからの風 ～ 第18号 3月2日配信

伊里中学校の皆さん、こんにちは。気がつけば、2月も終わり、昨日から3月。1年の終わりの月を迎えました。1、2年生の皆さんは学年末テストお疲れさまでした。3年生は、来週にせまった県立一般入試まで、あとわずか。サクラ咲く春を迎えるための、ラストスパートを期待します。



ここテヘランでは、昨年11月より続いた寒い寒い冬がようやく終わりを迎えようとしています。先日は最高気温が15度近くになり、昼はボカボカ陽気で春の訪れを感じました。学校前の街路樹も、冬の間は葉を落とし、寒々しく感じられましたが、じっと見ると、枝に無数の枝がついていました。植物も、季節の移り変わりを感じているようです。

季節の変わり目と言えば、以前お伝えしましたが、イランのお正月、つまり新年(ノウ・ルーズ)は3月。今年は、閏年の関係で、新年が3月20日となっています。ということは、日本で言うと、今は12月10日過ぎくらい。年賀状を書いたり、大掃除をしたり、新年の準備に大忙しのころです。ここイランでも、日本と同じような光景が見られます。大掃除は日本と同じように、1年間の汚れを取り、気持ちよく新年を迎えるために欠かせません。大掃除のことを、イランでは「フーネ タクニン(家を揺らす)」といいます。家を揺らすとは、つまり、汚れなどイヤなものを追い払うということのようです。また、通信15号で書きましたが、新年の準備として7つのSの文字から始まる縁起物を用意します。これらは「ハフトスィーン(7つのS)」といい、毎年、年の瀬になると街のスーパーに並ぶそうです。昨日、買い物をして近所のスーパーに買い物に行くと、ふだんはたくさんの野菜や果物が並べられているスペースに、赤と黒の金魚が泳ぐ金魚鉢がたくさん並べられていました。水の入った鉢も縁起物として家に飾られるそうです。この他にも、親戚の人の家を訪れる時の手土産にするための箱詰めチョコレートもうずたかく積み重ね、売られていました。これからイラン全土は、新年に向けて徐々にせわしなさが増してくるでしょう。洋の東西を問わず、新年を迎えることは楽しいことのように思います。



いことのように思います。

さて、今号は、1年間かけて私が学習してきたイランの言語＝ペルシア語についてです。この通信のタイトル「テヘランからの風」の原語は何と書いてあるか、分かりますか？分かりますよね。当然です。私もつい、1か月ほど前まで読めませんでした。最近になってやっと街中の看板や標識が何となく読めるようになってきました。みなさんに文字を覚えてもらいたいとは思っていません。しかし、アルファベット以外の文字を使う国について、ちょっと興味をもってもらいたいです。

## ◇ペルシア語とは

イランで最も多くの人に話されている言葉はペルシア語です。ペルシア語は言葉のグループとしては、「インド・ヨーロッパ祖語(そご)」の仲間に入り、主にヨーロッパで話されている英語やフランス語、ドイツ語、スペイン語、また、インドで話されているヒンディー語などと同じ仲間にはいるそうです。さらに深い説明もあるのですが、ここでは省略します。

日本人は、ほかでもない日本語を使って会話をしています。でも、ABCなどのアルファベットに古くから慣れ親しんだ日本人にとって、例えば「P」を見れば「Parking(駐車場)なんだな。」とか、洋服の[S][M][L]などを見て自分にあった大きさの服を買うことはできるはずですが。小学校では「ローマ字」を習い、街中のあらゆる場所にアルファベット表記の文字がならぶ日本にとって、英語に対する珍しさはもはや0といってもよいでしょう。しかし、ここイランでは、日本と違い、英語は街中にあふれてはいません。外国人が大勢訪れる博物館や美術館、観光地の標識には英語表記もありますが、多くの場所ではペルシア語表記しかないのが普通です。ペルシア語は私たち日本人にとっては未知なる言語・文字です。日本に初めて訪れた外国人が、日本語の看板を見ても???とうなるだけで、何もできないのと同じで、私たちも、ペルシア語だけで書かれた標識の前に立っても、「このミミスは何だ???」と固まるはずですが。

ペルシア語が、私のようなイランで暮らす外国人にとって難しいと感じる理由は、自分で1年前からをふり返って、だいたい次の3つのことが原因です。

1つめは、文字の切れ目が分からないこと。2つめは、書体がいくつかあり、また、似た文字がたくさんあること。そして、もう一つは、左からではなく、右から読むということ。これらについては、自分の経験をもとに次に詳しく説明したいと思います。

## ◇ペルシア語の文字

ペルシア語にはどんな文字があるのでしょうか？ペルシア語は32文字からなる言語です。英語が26文字、ペルシア語とよく似たアラビア語が28文字であることを比べると、少し多いような気がします。でも、日本語はどうですか？「ひらがな46文字とカタカナ46文字、それに漢字が1500文字以上・・・。」日本語が、「世界一難しい言語」と言われる一つの理由です。

アラビア語とペルシア語はとても似ています。ペルシア語にあって、アラビア語にない文字が4つあるだけです。しかし、文法や語彙なども全くといっていいほど違います。これはとても不思議なことでした。同じ文字を使っているのに、区別がつかないのが現状ですが、大きな違いがあるようです。そういえば、中国語と日本語も同じ「漢字」を使っていますが、意味が全然違うことが多いですね。それと同じだと思ってください。

ところで日本語とペルシア語は、文法的に実は似ているのです。例えば、「私は・本を・持っている。」という文章を考えてみましょう。これを、もし英語で言うとうようになりますか？

分かりますよね。「I have a book.」となります。これを直訳すると、「わたしは・もっている。1冊の本を。」となります。上の文(日本語)をペルシア語に翻訳すると、「Man yek ketab daram. (私は、一冊の本を持っている)」となり、日本語と言葉の流れが同じになります。

ح  
د  
ذ  
ر  
ز  
س  
ش  
ط  
ظ  
ع  
ق  
ک  
گ  
ل  
م  
ن  
و  
ه  
ی

ا ب پ ت ث ج چ ح خ د ذ ر ز ژ س ش ص ض ط ظ ع غ ف ق ک گ ل م ن و ه ی  
a b p t s j ch h x d z r z zh s sh s z t z ' gh f gh  
(q) k g l m n v/u h y/i

。ペルシア語の。砂漠の気候は極端です。年間を通して快適な季節というものほとんどなく、初夏から初秋にかけては最高気温が40度を超える灼熱の大地に、また、冬は寒風ふきすさぶ底冷えのする大地となります。実は、イランの国土の大部分はこのような気候の砂漠がしめていて、農業や経済活動はおろか、人が

住むことさえもままなりません。しかし、古来より、イラン人はそのような、言うなれば「不毛の大地」を利用する知恵を身につけてきました。ここヤズドをはじめ、砂漠の中には大小さまざまな都市が点在しています。そして、周りには緑の畑や数多くの樹木があります。年間降水量50mmにも満たない場所で、人々はどうして生活をして、命をつないできたのでしょうか…。

人間の生命の源は水。しかし、砂漠では水を手に入れることは容易ではありませんでした。まず、雨が降らない。また、たとえ降ったとしても、乾燥しているため、わずかに降った雨は大地にしみこむ前に蒸発してしまいます。このような条件でどうやって生きていけばよいのか…。昔の人は考えました。イラン中部はイラン高原といって、高地なので、周りには高い山がありました。その山頂付近には、冬になると雪が降りました。その雪融け水を利用しようと考えたのです。しかし、日本のように雪融け水が川を流れることはありませんでした。なぜなら、空気が乾燥しているため、流れているうちに蒸発してしまうからです。雪融け水は地下を流れていました。その地下水が流れる道は…。人間がつくった水路なのです。イランでは、砂漠地帯の地下に流れる水路をガナート(QANAT) (日本の社会の教科書にはカナートと表記されることが多い)といえます。ガナートは2,500年前(アケメネス朝ペルシア=ペルセポリスをつくった時代)からつくられていたという歴史が残っています。



ヤズドに、「ヤズド水博物館」というガナートの歴史などを解説した博物館があります。ここには、実際に使われていたガナートが残っています。また、ガナート作りに使った道具や水をくむ様子(写真左上)が写真や実物資料を展示して紹介されています。ガナートの深さはおよそ15~20m。急な階段を40~50段くらい下りていったところに、幅20cm程度の、石で囲まれた水路がありました(写真左)。このガナートには、水が流れていませんでしたが、他の場所のガナートを見学したときは、水が流れていました。

イランでは、今でもこのようなガナートが30,000本以上使用されているそうです。また、この技術はイランだけでなく、周辺諸国にも伝わっていると言われています。他にも、水を蓄えておくための貯水池も数多く残っています。これは、アブ・アンバールと呼ばれ、独特の形(写真右奥)をしています。モスク(礼拝堂)の天井のように、タマネギ型をした土作り建物があります。周囲には煙突のようなものが4本立っているのが普通です。周囲の煙突をよく見ると、上部に穴が空いているのが分かります。この煙突は、バード・ギール(風探り塔)(写真右)と呼ばれています。夏が近づくと、ヤズドなど砂漠地帯の日中の気温は40度を超えるようになります。また、強烈な太陽光の照り返しによって上昇気流つまり風が発生します。

古代の人々は、この砂漠特有の自然現象を利用して、水を冷やすことを思いつきました。アブ・アンバールに蓄えられた水には直接太陽の光が当たりませんが、すぐ外は灼熱の世界なので、水は温まります。この水の温度を下げるために、バード・ギールから入ってきた風を利用しました。灼熱の大地を吹く風ですが、バード・ギールから取り込まれた風は、太陽の光が届かない地下へと吹いていく間に冷やされ、水の温度を下げる効果

がありました。今、ヤズドの街を高いところから見ると、街の家々の上には、たくさんバード・ギールがあります。これらは、現在でも天然のクーラーとして利用されています。ヤズド位置の高さを誇るバード・ギールがある庭園に行っただけのことです。当日は、朝から曇りがちで、昼から強風が吹き荒れ、とても寒い一日でした。バード・ギールの真下に立つと、塔の頂上から吹き降ろす風を体全体に受け、身も凍るようでした。ガイドさんに「ここは夏に来るといいぞ。周りは暑くてもここは快適さ。今(冬)は、とても寒いからお勧めしない。」といわれました。

ヤズドに限らず、イランの砂漠都市に住む人々は、過酷な自然条件にもめげず、長い歴史の中で自然とうまく向き合ってきたんだなぁと感じました。気候などの自然条件を人間の力によって変えることはできません。であるならば、その自然条件のなかでいかに快適に生きていくか。今、日本は東日本大震災による福島第一原子力発電所の災害で、国内の原子力発電所がほとんど稼働(かどう)していないと聞きます。いつでも好きなときに好きなだけ使えた電気が、足りなくなる日が来るかもしれません。日本の気候、気象条件の中で、電気だけに頼ることなく快適に生きていくにはどうすればよいか。そのヒントが、もしかしたらヤズドの街にはあるのかもしれない…。

### ◇ヤズド発祥の宗教・ゾロアスター教

通信第11号(ペルセポリス特集)でふれましたが、古代イランを支配していたアケメネス朝ペルシアの時代より、イスラム教が入ってくるまでの間、イランではゾロアスター教という宗教が中心となっていました。時の王たちも熱心に信仰していたことでしょう。サーサーン朝ペルシアの時代(紀元後226年~651年)には、ペルシア帝国の国教となっていました(第11号で書いた「アケメネス朝ペルシアでは、国の宗教=国教となり、国王の保護のもとにおかれた。」は誤りで、正しくはサーサーン朝ペルシアの時代から)。このゾロアスター教と関係が深いのが、ヤズドです。

ヤズドには、多くのゾロアスター人が今でも住んでいます。彼らはイスラム教の国・イランでも、宗教の自由を保障され、生活をしています。ヤズド市内には、多くのゾロアスター教の神殿があります。一般的には、私のような観光目的で訪れる異教徒は神殿に入ることはできないのですが、観光客でも神殿内部を見学できるところがあり、そこを訪れました。



人が火をととても大切にしているのわかります。神殿の中央には、1500年前から絶やさず燃え続けている聖火が燃えていました。これは、ゾロアスター教のシンボル・



神殿の名前はアーテシュ・キャデ(火の家)(写真左)。ゾロアスターとは、この内部を見ると分かります。また、神殿の正面上部にアフラ=マスダ(写真右)

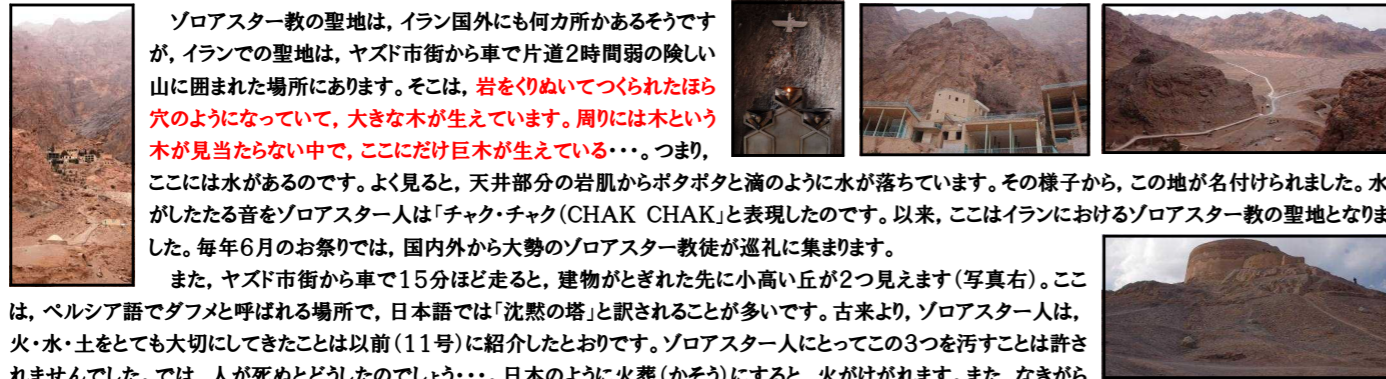


が飾られていました。これは余談ですが、ゾロアスター教のシンボル・アフラ=マスダはアルファベット表記をすると、「AHURA=MAZDA」となります。おや、このつづり、日本のどこかで見たつづりではありませんか？

そうです。広島市に本社のある日本の自動車メーカー、マツダのつづり(MAZDA)と同じなのです。マツダ自動車の松田社長は、自分の姓と、古代イランのゾロアスター教の神様・アフラ=マスダをかけて、社名にしたと言われています。これは、イラン人も知っているエピソードで、日本の自動車メーカーが自分の国の宗教の神様の名前を社名につけたことに誇りを持っているようです。(ちなみに、日本のマツダ車はイランでもたくさん走っています。)

ゾロアスター教の聖地は、イラン国外にも何カ所かあるそうですが、イランでの聖地は、ヤズド市街から車で片道2時間弱の険しい山に囲まれた場所にあります。そこは、岩をくりぬいてつくられたほら穴のようになっていて、大きな木が生えています。周りには木という木が見当たらない中で、ここにだけ巨木が生えている…。つまり、ここには水があるのです。よく見ると、天井部分の岩肌からポタポタと滴のように水が落ちています。その様子から、この地が名付けられました。水がしたたる音をゾロアスター人は「チャク・チャク(CHAK CHAK)」と表現したのです。以来、ここはイランにおけるゾロアスター教の聖地となりました。毎年6月のお祭りでは、国内外から大勢のゾロアスター教徒が巡礼に集まります。

また、ヤズド市街から車で15分ほど走ると、建物がとぎれた先に小高い丘が2つ見えます(写真右)。ここは、ペルシア語でダフメと呼ばれる場所で、日本語では「沈黙の塔」と訳されることが多いです。古来より、ゾロアスター人は、火・水・土をととても大切にしてきたことは以前(11号)で紹介したとおりです。ゾロアスター人にとってこの3つを汚すことは許されませんでした。では、人が死ぬとどうしたのでしょうか…。日本のように火葬(かそう)にすると、火がけがれます。また、なきがら



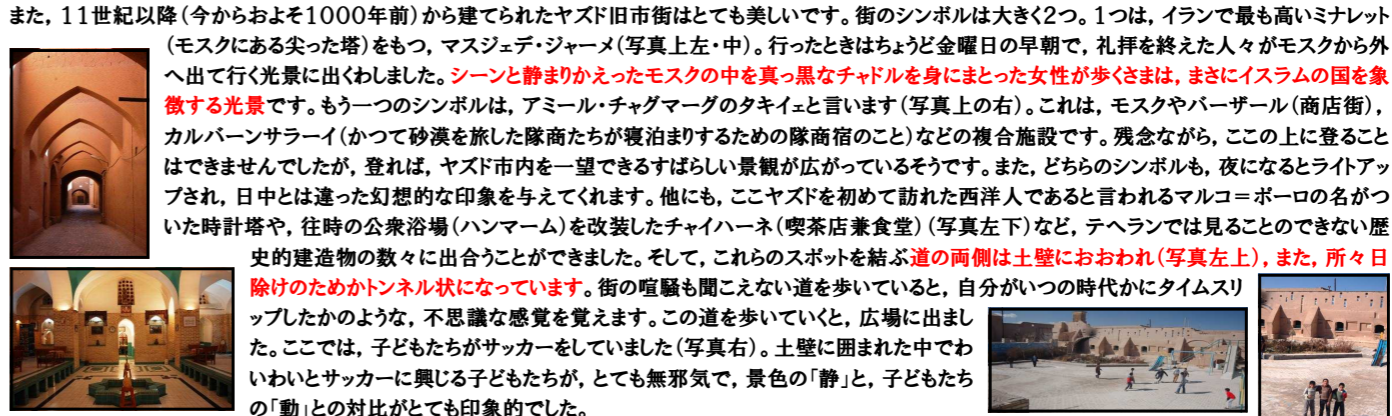
を土に埋める土葬(どそう)にすると、土がけがれます。そこで、ゾロアスター人は、火も水もけがさない死者を葬(ほうむ)る方法を考えつきました。それが鳥葬(ちゅうそう)と呼ばれる、独特の方法です。



ゾロアスター人の誰かが亡くなると、人々がそのなきがらをかついで丘の上にやってきます。そして、丘の上の鳥葬場に安置します。やがて、鳥がやって来て死者をつつき始めます。そして、やがて死者は鳥によって喰い尽くされてしまうのです。こうやって、鳥の力によって自然に還す方法をとっていた(1930年代に禁止となり、今は、土葬となっているそうです)あとが、残っているのです。また、そのふもとは、法律によって鳥葬が禁止となって以降、亡くなったゾロアスター人の墓が整然と並んでいました。イスラム教徒のお墓との1番の違いは、墓石にアフラ・マスダが描かれていることでしょうか。これまた余談ですが、この墓地の一角には墓をつくるための材料がこんもりと置かれていました。ガイドさんに聞くと、お墓をつくるのは家族や友達、親戚の男性が中心だそうです。レンガで型を作り、レンガとレンガをセメントで固定し、土をかぶせる…。そしてその中に遺体を安置する…。日本の基準からすると理解しにくい部分ではありますが、家族や親族の結束がととても強いイランならではの。

### ◇土壁が美しい旧市街

テヘラン暮らしも10か月を超えると、首都にありがちな高層ビル、高層マンションの林立する光景に飽きてきます。その点、ヤズドは街全体がととても低く、高層マンションや高層ビルはほとんど見られません。また、11世紀以降(今からおよそ1000年前)から建てられたヤズド旧市街はととても美しいです。街のシンボルは大きく2つ。1つは、イランで最も高いミナレット(モスクにある尖った塔)をもつ、マスジェデ・ジャーメ(写真左上・中)。行ったときはちょうど金曜日の早朝で、礼拝を終えた人々がモスクから外へ出て行く光景に出くわしました。シーンと静まりかえったモスクの中を真っ黒なチャドルを身にまとった女性が歩くさまは、まさにイスラムの国を象徴する光景です。もう一つのシンボルは、アミール・チャグマールのタクキエと言います(写真上の右)。これは、モスクやバーザール(商店街)、カルバーンサライ(かつて砂漠を旅した隊商たちが寝泊りするための隊商宿のこと)などの複合施設です。残念ながら、この上に登ることはできませんでしたが、登れば、ヤズド市内を一望できるすばらしい景観が広がっているそうです。また、どちらのシンボルも、夜になるとライトアップされ、日中とは違った幻想的な印象を与えてくれます。他にも、ここヤズドを初めて訪れた西洋人であると言われるマルコ=ポーロの名がついた時計塔や、往時の公衆浴場(ハンマーム)を改装したチャイハーネ(喫茶店兼食堂)(写真左下)など、テヘランでは見ることでできない歴史的建造物の数々に出会うことができました。そして、これらのスポットを結ぶ道の両側は土壁におおわれ(写真左上)、また、所々日除けのためトンネル状になっています。街の喧騒も聞こえない道を歩いていると、自分がいつの時代かにタイムスリップしたかのような、不思議な感覚を覚えます。この道を歩いていくと、広場に出ました。ここでは、子どもたちがサッカーをしていました(写真右)。土壁に囲まれた中でわいわいとサッカーに興じる子どもたちが、とても無邪気で、景色の「静」と、子どもたちの「動」との対比がととても印象的でした。



### ◇旅で出会った素敵な人々

旅の魅力は何でしょう？めずらしい景色、おいしい食べ物、おみやげ…。人それぞれ、「旅」に求めるものはさまざまです。私が旅に求めるものは、「非日常への好奇心」、そして「旅先での出会い」です。今回の旅は、家族をテヘランに残しての同僚の先生との2人旅でした。今回は、私のペルシア語の力がどこまで通用するか、英語の表記をどれだけ読めるかを確かめるため、ガイドの人に頼らずに出かけました。頼るべくは自分の語学力と同僚の先生のみ。そんな中、いくつかのハプニングがありました。予定していたバスターミナルと違うところに到着したり、ホテルが予想以上に遠かったり、観光場所が閉まっていたり…。そんなハプニングの中、心に残る旅ができたのは、当地・ヤズドに暮らしている人々でした。2日間に渡って、車に乗せてくれ、歩いては行けない観光地に連れて行ってくれたタクシードライバー(写真左下)。また、ホテルに向かうためにトボトボと夜道を歩く私たちを車に乗せてくれ、親切にホテルまで送り届けてくれた人。観光場所が閉まっていた、がっかりしていた私たちに声をかけてくれた食堂のお客さん…。日本人と知って目の色を変えて話しかけてくれる人もたくさんいます(商売目的ではなく)。イラン人は、本当に親切で、おもてなしの心(ホスピタリティ)にあふれていると思います。海外との関係が悪化している現在ですが、決して国民は悪い人ではありません。欧米諸国による攻撃の対象となる国ではないのです。なかなかイラン国外にいる人たちから見ると、想像できないかもしれませんが、実際に暮らしてみると切に思います。私たちのように、イランに暮らす外国人は、外にむけて発信する必要があると思います。それによって、より多くの人が本当のことを知ることで、正しい行動ができるのではないのでしょうか。



×	!	@	#	\$	%	^	&	*	(	)	-	+	←	
÷	1	2	3	4	5	6	7	8	9	0	=		Backspace	
Tab	←	→	ض	ص	ث	ق	ف	غ	ه	خ	ح	ج	ب	
Caps Lock	↑	ش	س	ی	ب	ل	آ	ت	ن	م	ک	گ	Enter	
Shift	↑	ظ	ط	ز	ر	ذ	ا	د	ء	و	>	<	?	Shift
Ctrl	Win Key	Alt							Alt	Win Key	Menu	Ctrl		